

---

# 瞬着装甲プレイヤー

ツヴァイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瞬着装甲ブレイバー

### 【Nコード】

N2856G

### 【作者名】

ツヴァイ

### 【あらすじ】

とある街の、とあるヒーロー……。しかし彼は、ただの変身ヒーローではなかったのです……。ギャグテイスト(?)の文章です。かっこよさを期待しないでください。

## 第一話：その名はブレイバー！

夜の繁華街。そこは、様々な混沌が渦巻く場所でもある。華やかな街灯の中、犯罪が見え隠れする。そんな中を、ひとりの少女が走っていた。

「はあ、はあ……もう、しつこいんだから……！」

背後に迫る陰から、逃れようと走る。しかし。

「嘘、行き止まり!?!」

目の前には袋小路。慌てて引き返そうとするも、そこに立ちふさがる複数の人影。

「へへ、やつと追い詰めたぜ、お嬢ちゃん」

「せつかくの俺達のお楽しみを、邪魔してくれた礼はさせてもらおうぜ?」

いやらしい笑い声をあげながら、近づいてくる男達。

事の起こりはこの少女、早乙女弥生が柄の悪い男達に絡まれている少女を助けた事だった。

何とか少女を逃がす事はできたものの、今度は自分が追われることになってしまった彼女。街を走り回り、何とか逃れようとしたのだが……。

「逃がした娘の分も、しつかりお相手してもらわないとなあ?」

万事休すか。近づく男達を前に、目を閉じる。来るはずのない助けを求めて。

「待てーい!」

その時、何者かの声が聞こえた。見れば、路地の入り口に立つひとつの影。

「か弱き少女を、力づくで物にしようとする行為、銀河連邦法第841条違反! たとえ天地が許しても、この正義の使者ブレイバー

が許さん！」

そこにはジーンスに革ジャン、フルフェイスのヘルメットのようなものを被った男が立っていた。

「はあ？ てめえ、何言つてやがるんだ？」

「やろうつていうのか、あん？」

男達がヘルメット男を囲む。しかし、ヘルメットの男は怯む気配も見せない。

「仕方がない。銀河連邦法に基づき、お前達を処罰する！」

謎のヘルメット男はすばやい動きで、男達に飛び掛る！！

「断罪パーンチ！」

「げぶっ！」

「断罪チョーップ！」

「あばらっ！」

「断罪スープレックス！」

「ひぎゃ！」

たちまちのうちに、男達は薙ぎ倒されていく。そして暴力の嵐が過ぎ去った後、そこに立っているのは弥生とヘルメット男だけになった。

弥生は恐る恐る男に声をかける。

「あの、ありがとうございました……」

「うむ、この辺りは物騒だ。君も気をつけたほうがいい」

はっはっはと高笑いする男。その時、弥生の脳裏に浮かんだのは、尊敬の念でも礼の感情でもなく『この男、危ないんじゃない？』というものだった。

何よりもその格好。ヘルメットのようなものを被って高笑い、どこの変質者と間違えられてもおかしくはない。あまり係わり合いになりたくはないタイプだ。

「えっと、私そろそろ行きますから」

「うむ、気をつけて夜道を帰るがいい。なんなら君の家まで送っていてもいいぞ？」

「いえ、結構です！」

弥生はきつぱりさっぱりと拒否した。

「なんか、色んな意味で疲れちゃった……」

とぼとぼと夜道を歩く。襲われかかった事はともかく、変な奴と知り合ってしまった。あんな相手とは、二度と関わりたくはないのだが。

「関わっちゃうんだろうなあ……」

いやな予感というものは、えてして当たるものなのだ。特にこういう厄介ごとの場合には。

「ただいまー」

家に帰り着く。弥生の家は、母の真由美とふたり暮し。父親は単身赴任で海外に行っており、しばらく顔も合わせていない。特に弥生は気にしてはいないのだが。

「あら、お帰りなさい。そうそう、弥生にも紹介しておかなくちゃね？」

出迎えた母親の真由美が何やらうきうきと浮かれながら、弥生の背中を押していく。

「ちよつとちよつと、何なのよ？」

「いいからいいからー」

ずるずると父親の部屋であった場所に連れて行かれる。そこには、ひとりの男の姿。

「一文字さん、この子が私の娘、弥生です」

「一文字？」

弥生は男を見る。……どこかで見たような姿。

「はっはっは、お子さんですか。よろしく、弥生ちゃん」

握手を求めてくる。ジーンズに革ジャン。その姿は……。

「あー！ あなたさっきのヘルメット男！」

男と母親は、顔を見合わせる。しかし、この感じは間違いない。

この男は、弥生を助けてくれた男だ。

「何であなたがここにいるのよ？」

「弥生、失礼でしょ？」

「でも……どうなってるの、ママ？」

納得できず、説明を求める。

「この人は、一文字アキラさん。今日から家に下宿する事になったのよ？」

「そんな話、私聞いてない！」

「あらあら、説明しなかつたかしら？」

真由美は相変わらぬのんきだ。危機感に乏しいというか。弥生はキツとアキラを睨みつける。その視線にも、まったくたじろぐ様子の無いアキラ。

「今日からお世話になる、一文字アキラだ。よろしくな、弥生ちゃん！」

キラリ、輝く瞳。キュピーン、きらめく白い歯。まるで暑苦しい男の見本。鬱陶しいこと、この上ない。

「それでアキラさん、お仕事は何をなさっているの？」

「はい、正義の味方をやっています」

「あらあら、それは素敵ね」

和やかに談笑する真由美とアキラのふたり。見ていて実に腹が立つ。正義の味方って何、とツッコミを入れたくなる心を抑えるのに苦勞する弥生。

「正義の味方のお仕事って、どういうのかしら？」

「とりあえず、悪い奴は排除、絶滅するというのが信条です」

「あらまあ、弱肉強食なのね」

それは違う、彼の言っている事は一步間違えればファシズムだ。しかも自分が正義だと言い切ってしまう辺りが病的である。そんなツッコミが喉まで出かかる。

「悪党に人権はありませんからね。銀河連邦法でも、臭い物には焼却と記されています」

「まあ、エコロジーね」

ふたりの会話を聞いてみると、頭が痛くなってくる。ボケとボケの話を書いてある事ほど苦痛な事はない。

「……私、部屋に戻るわ」

頭痛を押し殺しながら、部屋を出ようとする弥生。しかし、そんな彼女の肩を、がっしりと捕まえる腕。

「ちよつと待つてくれたまえ、弥生ちゃん。君に話がある」

「あらあら、若いふたりでお話？ 私ももう少し若かったらねえ……」

相変わらずのんきな母親は放っておいて、弥生は手を振り解く。

「何の用？ 私にはあなたと話することなんて無いけれど？」

「大事な話なんだ。真由美さん、ふたりきりで話をさせてください」

「真由美さんなんて呼ばれると、何だか心がときめいちゃうわー。ふふ、それじゃあふたりでごゆっくり、ね？」

ほほほと笑いながら、真由美は部屋を後にする。後に残されるふたり。

「……それで、何の用？」

あいも変わらず、暑苦しい笑顔を浮かべるアキラに問いかける。

「うむ、君はあの時俺に助けられた。しかし何故、あの変身したヒーローが私だと分かったんだ？」

「分かって当然でしょう！ ヘルメット被ってただけじゃないの！」

あれで変身なんて、おこがましいにもほどがある。

「うーむ、正体がこうも簡単にはれてしまうとは、誤算だった……」

「あなた、人の話聞いている？」

うむむと考え込むアキラを前に、ため息をつく。この男は、本当に頭のネジが足りないのではなからうか？

「仕方がない……弥生ちゃん、これから話す事は、秘密にしておいてもらいたい」

「何よ？」

「実は俺は……銀河連邦から地球に派遣された宇宙刑事、ブレイバ

「なんだ」

秘密も何も、さつき母に『正義の味方』とか言っていたのだが。

「この青い星を守るため、俺はブレイバーに変身し、日夜戦い続けているんだ」

「それが、あのヘルメットの変態姿？」

「うむ、実は本部から予算が回ってこなくてな。こんな辺境の星を守るのに、あまり予算はかけられないんだ。コンバットスーツはフル装備にすると、膨大な費用がかかる。そこで最低限の装備だけで戦っているのだが……」

馬鹿馬鹿しいにも、ほどがある。どこの世界にそんな話を信じる人間がいるものか。

この男は、自分の妄想で正義の味方をやっているだけなのだ。

「はいはい、分かったから、もう行ってもいいでしょ？」

「ああ、この事は、他の人には秘密だぞ？」

「話せるわけ無いでしょ。私まで変な人に思われるじゃない」

弥生は部屋から出る。まったく、どうしようもない人間と同居する事になってしまった

ものだ。妄想男と一つ屋根の下。この先、何が起こるやら……。  
ため息をひとつつくと、弥生は自分の部屋へと向かった。



**第一話…その名はプレイヤー！（後書き）**

とりあえずこちらで連載します。感想よろしくお願ひしますです。

## 第二話：学園パニック！ 怪人現る！

「……………」

朝食の場。そこには、不機嫌そうな弥生と、ニコニコ微笑む真由美と、暑苦しい笑顔を浮かべるアキラの姿があった。さわやかな朝の雰囲気、ぶち壊しである。

「今日はどうなさるの、アキラさん？」

「ええ、今日はこれから町内のパトロールをしようかと」

「ふふ、頑張ってくださいね」

コーヒーを勧めながら、真由美が微笑む。

「やる事無いから、街の中をぶらつくだけじゃない。この妄想無職」  
弥生の鋭い皮肉も、まったく堪えていない顔でアキラは笑う。

「やってられないわ。私、もう学校に行くから」

早めに朝食を切り上げ、席を立つ弥生。

「ああ、学業頑張るんだぞ、弥生ちゃん」

「あなたに言われたくないわよ！」

アキラを無視し、さっさと玄関に出る。外は晴れやかな青空。

弥生は、嫌な事を頭から追いやって、学校へと歩き出した。

「それで、大変なのよ……………」

教室で、弥生は隣の席の眼鏡の少女に愚痴をこぼす。騒がしい教室。授業前のひと時。

「今時、そんな人もいるんですね。自称正義の味方なんて、お話の

中だけだと思つてました」

「お話の中だけだったなら、どんなに良いか……実際に相手をする方は、たまらないわ」

「大変ですね」

眼鏡少女は同情の視線を送る。彼女は松原瑞穂。弥生の友人である。今時絶滅危惧種の眼鏡っ娘委員長である。

「でも、もしも本当に正義の味方だったら……」

瑞穂は僅かに顔を曇らせる。

「どうしたの、瑞穂？」

「あ、いえ。何でもありません」

慌ててずり下がった眼鏡を直す。その様子に、不審を抱きながらも、特に気にする事もない弥生。

「うおーい、授業を始めるぞー」

教師が入ってきた事で、その話はそこまでになった。

「したがって、この公式は……」

退屈な授業が続く。弥生は窓辺の席に座り、ぼーっと外を眺めている。

この学生生活が、一体なんの役に立つのだろうか。自分のため？ 将来のため？ とにかく、もうすぐ昼休み。それまではこの時間を耐えるしかない。

「あれ、なんだろ……？」

校門の所、ひとりの男が立っている。生徒の保護者だろうか。しかし、どうも感知的にそうとは思えない。ここは女子高である。変質者の類かもしれない。

男は校舎を見回すと、ゆっくりと昇降口へと歩いてくる。

「どうしたんですか、弥生ちゃん？」

隣の瑞穂が心配げに尋ねてくる。何でもないと答えて、再び外を

見ると、男の姿はすで見えなくなっていた。

「心配のしすぎよね……」

そう、あまりにも理不尽な事が身近で起こったおかげで、少々過敏になっただけなのだ。あの男だって、きっと大したことはないに違いない……。

やがて昼休みを知らせるチャイムが鳴り、弥生は席を立ち、購買へと向かった。

サンドイッチと飲み物を買って、教室へと戻る。その途中。

「きゃー！」

廊下の向こうから叫び声が聞こえた。慌てて叫び声の所まで走る。そこには。

「女子高生なら、きちんとした身なりをしろー！」

叫びながら生徒を追い回す、見るからに不審者バリバリの男がいた。

「膝上スカート禁止！ ルーズソックス禁止！ 今すぐ着替えるー！」

野暮つたいスカート片手に女生徒を追い掛け回す。その姿はこれ以上はないくらいに変質的である。

「まったく、何なのよ、もう！」

横の掃除用具入れから、モップを取り出す弥生。そしてそのまま男に不意打ちの一撃を食らわせる。ぱたりと倒れこむ男。

「みんな、今のうちに逃げなさい！」

散り散りに逃げ去っていく女生徒達。やがてむっくりと男は立ち上がった。

「何をする、女。私は風紀の乱れたこの学校を正しい道へと導くために……」

「うるさい、変態」

再びモップを振るい、脳天に一撃。頭から煙を出し、沈黙する男。「まったく、こんな奴さっさと先生に突き出して……え？」

再び起き上がる不審者。しかし、その目の色は、先ほどまでとは明らかに違う。

「大人しくしていれば、付け上がりおつて。俺の本当の力を見せてやる！」

男の周りに、風が渦巻く。そして、唐突に服が破れ、全裸になる男。

「ちよつと、何脱いでるのよ！」

慌てて顔を手で隠す。そのとんでもなく下劣な姿に、廊下は異次元と化す。

「ふははは、見るがいい、俺の本当の姿を！」

一瞬廊下が光り輝き、そして静けさが戻る。恐々と弥生が手を離してみると、そこには詰襟の学生服のようなものを纏った怪人の姿。

「俺の名は修正怪人フーキーン！ 小娘、貴様の態度を、修正してやる！」

「……………ん？」

その時、一文字アキラはラーメン屋で昼食をとっていた。

「今、助けを呼ぶ声が聞こえたようだ……………」

「はいよ、替え玉お待ち！」

とりあえず、アキラは目の前のラーメンを征服する事にした。

「ちよつとちよつと、何なのよ！」

弥生は学校中を追い掛け回されていた。背後から迫り来る、修正怪人フーキーン。

「その長い髪を切らせろ！ スカートの丈を直させろ！」

変質的にも、ほどがある。怪人というより、これではただの変人

だ。

何とか昇降口を抜け、校庭に出る。

「ええい、修正アーム！」

突如、追っ手の両腕がびよんと伸びる。それに足首を掴まれ、その場に倒れこむ弥生。

「ふっふっふ、さあ、このスカートに履き替えてもらっぞ？」

じりじりと迫る怪人。早乙女弥生、絶体絶命のピンチ……。

「待てーい！」

その時、辺りに響き渡る声。見回せば、学校の校舎、その屋上に立つひとりの影。

「お洒落ファッション、女の特権！ ルーズ、ミニスカ、大いに結構！ 着飾る少女を自分色に染めようとするとする暴挙、断じて許せん！」

キュピーン。太陽を背に、ポーズを決める！

「宇宙刑事ブレイバー、ただいま参上！ とっつ！」

屋上からダイブする。そしてそのまま……。

ドゴチーン！

猛烈に痛そうなおノトマペをあげ、怪人の頭にヘルメットから激突した。

「くおおーっ！」

頭を抑え、転げまわる怪人フリーキーン。

説明しよう。ブレイバーのヘルメットは、象が踏んでも壊れない強度を備えているのだ！

「き、貴様！ 何の権利があつて、私にフライングヘッドバットを食らわせるのだ！」

革ジャンにジーンズ、ヘルメットだけを装備した男に問いかけるフリーキーン。

「貴様ではない、ブレイバーだ！ この地球の愛と平和を守る、正義の戦士だ」

キュピーン。再びポーズを決める。

「怪人、貴様の行いは、銀河連邦法に違反している。大人しく裁き

を受けるがいい！」

「面白い、やれるものならやってみろ」

にらみ合う両者。先に動いたのは、怪人だった。

「修正アーム！」

びよびよと伸びる両腕が、ブレイバーを掴む。

「修正スイング！」

そのままぶんぶんとブレイバーを振り回し、地面に叩きつける。

「ふはははっ！ 脆い、脆すぎるぞ！」

地面に頭から半ばめり込んでいるブレイバーを眺めながら、高笑いをする怪人。

そんなブレイバーに駆け寄り、弥生は彼を助け出す。

「ちよつと、ヒーローごっこもいいかげんにしなさいよ！」

この男は大馬鹿者だ。相変わらず自分がヒーローだと信じきっている。それで命を落としては、何にもならないというのに。

「ほら、逃げるわよ！」

「そうはいかない。俺は宇宙刑事だ。怪人を放っておく事はできない」

「……もう、勝手にしなさい！」

弥生はひとりでその場を逃げ出そうとする。しかしその動きを怪人が見逃すはずもなく。

「きゃあっ！」

その伸びる腕で、怪人は弥生を捕まえていた。

「さあ、このロングなスカートをこの場で履き替えてもらおうか」

「嫌よ、そんな野暮りたいの！ 大体この場で着替えるなんて、どうかしてるわ！」

「……まさかお前、女子高生にあるまじき下着を着けているのではなからうな？」

「そんなわけないでしょ！」

「いいや、こうなったら確認するまで。さあ、スカートを脱げい！」  
伸びた腕でスカートを脱がそうとする。必死で抵抗する弥生。当

人達は必死だが変質者が少女を襲っているようにしか見えない。

「待てい！ 俺はまだ終わっちゃいないぞ！」

しかしヘルメット姿のアキラが、そんなふたりを引き剥がす。

「まだやる気か、貴様！？」

「当たり前だ。正義のためならば、俺は負けない！！」

再びにらみ合う両者。そしてフーキーンは再び腕を伸ばすが、今度はブレイバーは巧みにそれをかわす。

そして本体に近づくと、拳を握り、一気に踏み込む。

「断罪パーンチ！」

充分に加速の乗った拳が、怪人フーキーンにめり込む。

「げぶらっ！」

吹っ飛ばす怪人。そこに再び襲い掛かる。

「断罪キック！ 断罪ストンピング！ 断罪馬乗り！ 断罪ラッシ

ユパンチ！」

もう、ボコボコである。その戦い方は正義の味方の戦いとは言えず、もはやチンピラの喧嘩レベルだ。

「やめっ、ちよっとタンマ！ ストップ！」

「断罪パチキ！ 断罪……なんだ、怪人？」

「お前、仮にも正義の味方だろ！ こんな無茶苦茶な戦い方するな！」

「悪党に人権はないっ！」

……言い切った。

「もっと正義の味方らしい戦い方をしてくれ！ こんな事でやられたら、情けなくて涙が出るわ！」

「むう……そうか、仕方がない」

ブレイバーは怪人から離れると、両腕を高く掲げる。

「ならば必殺技で止めを刺す。フュリス、断罪ブレードを転送してくれ！」

途端に一筋の光が、天から降り注ぐ。その光はブレイバーの両手に集まると……。



ぼんっ！

……ピコピコハンマーに姿を変えた。

「な、なんじゃこりゃー！」

プレイヤー、大騒ぎ。その時、ひらひらと一枚の紙が空から舞い降りてくる。弥生が手にとって読んでみると。

『経費削減。それで何とかして』……と書かれていた。

「お、俺の断罪ブレードがあー！」

もう滅茶苦茶である。

「あの……私、もう帰ってもいいっすか？」

怪人がプレイヤーに言葉をかける。

「むっっ……こうなればしかたがない。怪人、貴様をこれで倒す！」  
上段にピコピコハンマーを振りかぶる。輝きだすハンマー。

説明しよう。プレイヤーの正義が頂点に達した時、宇宙からのエネルギーを得てプレイヤーは必殺技を使うことができるのだ！

「必殺、プレイヤーラスト！」

振りかぶられたハンマーが、怪人の脳天を捉える。そして。

「うぎゃああっ！」

殴られた怪人は、一瞬の後、大爆発を起こして砕け散った。

「……やったの？」

弥生は立ち上がる。ヘルメットを被ったアキラは高笑いをしていく。勝利の余韻に浸っているのだらう。……勝負の内容は別として。

そんなふたりを、屋上から眺めているひとりの少女がいた。

「フリーキーンが敗れるなんて……」

そよぐ風が、ポニーテールを揺らす。

「次の怪人を、準備しなければ。この世界を、正しい方向へ導くためにも……」

陽光を反射して、きらりと眼鏡が光った。

**第二話：学園パニック！ 怪人現る！（後書き）**

続いてしまいました。

ドキドキしながら、感想を待っていますです。

### 第三話：パートナーは空の上から

「……………」

カチャカチャと、無言でキーをタイプする少女。年の頃、十二、三歳くらいだろうか。目の前のスクリーンには、先日のブレイバーの戦いが表示されている。

「……………追加予算、下りるかな」

ぱちんと表示を消すと、少女は深く座っていた椅子にもたれかかった。

「ごちそうさまでした！」

一文字アキラは、目の前に出された朝食を全て平らげていた。真由美はそんなアキラをにこやかな笑みで眺める。まさに、彼の食べっぷりは惚れ惚れするようなものだ。

「ふふ、お粗末さまでした」

真由美は後片付けをするために、キッチンへと戻っていった。後にはアキラと弥生が残される。

「それにしても、あなたって本当に正義の味方だったのね」

「俺は嘘はつかないぞ？」

「だって、信じられないじゃない。自分がヒーローだなんて言う人。この間の戦いで、怪人を倒したアキラ。それを見れば、流星の弥生とて認めないわけにはいかない。

ともかく、彼は変身ヒーローなのだ。ヘルメットだけしか、身につけないが。それでも紛れもなく正義の味方なのだろう。

「はあー、それにしても怪人が出没するなんて、この街も物騒になったわね」

「悪党はいつでも地球を狙っている。だが心配はいらない！ この俺がいる限り、奴らの好きにはさせん！」

「はいはい、勝手に熱血してなさい」

この男のペースに合わせては駄目だ。果てしなく疲れるだけである。そのくらいは弥生も学習している。

「さて、今日は休日だから家にいるけど……あなたはどつするの？」

「ああ、今日は査定がある日だからな。家にいるとしよう」

……査定？ 一体何のことだろうか。しかし、それを尋ねる間もなく、アキラは部屋へと戻っていつてしまった。

音楽を聴きながら、雑誌のページをめくる。ベッドの上で、弥生はごろごろと過ごしてた。たまの休みである。こつという過ごし方も、文句を言われるものではない。

ふと時計を見れば、もういい時間である。そろそろ昼食のために下に降りたほうが良いだろう。

階段を降り、ダイニングへ。そこには真由美が、すでに食事の支度をして待っていた。

「あれ、アキラは？」

いつもならば、真つ先に食卓についているはずの男がいない。

「何でも、大事な会議中なんですって」

「会議？」

どこで、一体誰と？ 疑問は尽きない。

とりあえず彼の部屋まで行ってみる。ドアを前に、ノックをしよう……。

スパーンツ！

唐突に部屋の中から甲高い音がする。慌ててドアを開けると、そこには。

「アキラも、もうちょっと考えて行動してください。頭部パーツだ

けとはいえ、装着には予算がかかるんですから」

「うう、すまん……」

……ハリセンを持った少女と、その前に正座するアキラの姿があった。

「いいですか？ 先ほどの戦いのデータを見せてもらいましたけど、アキラの戦いには無駄が多すぎます。どこの世界に戦う前に名乗りを上げる警官がいるんですか？ そんな暇があったら、さっさと不意打ちでも何でもして、倒してしまえばいいんです」

「だが、ヒーローってというのは、見栄えも大事で……」

スパーンツ！

ハリセンの一撃。

「……すいませんでした」

「分かれば良いです。それで、用途不明金の件ですが」

「ああ、あれは近所のラーメン屋が大盛りサービスをやっていたから」

スパンスパーンツ！

「すみません、つい出来心で……」

弥生は黙ってドアを閉めた。

「あら、アキラさんは？」

「しばらく、放っておいた方がいいわ」

今見た光景は、忘れたほうがいいだろう。……あまりに哀れだ。

しばらくして、アキラはひとりの少女を連れてダイニングへとやってきた。

「あらあら、アキラさん。その子はどなた？」

「ああ、紹介が遅れまして。こいつはフユリス。俺のサポート兼マネージャーをやっています」

「フユリスです。はじめまして。できの悪いアキラが、いつもお世

話になっています」

まったくの無表情で、ぺこりと挨拶する。小柄な少女。ショートボブの髪が、さらりと流れる。

「での悪い、は余計だろ」

「不出来なパートナーを持つと、苦労します」

顔色も変えずに、さらりと言つてのける。非常にクールである。

「フユリスちゃんも、お昼ご飯食べるわよね？」

「はい、いただきます」

真由美がいそいそと支度をする。そんな後ろ姿を眺めながら、弥生がフユリスに問いかける。

「サポートって、一体何をやってるの？」

「私は主に、衛星軌道上の『ハイペリオン』という宇宙巡洋艦でアキラのサポートをしています。アキラの変身時のパーツの転送、戦闘データの収集、仕事は山積みです。それなのに、アキラときたら……」

横に座るアキラのこめかみを、ぐりぐりと小突き回す。黙って少女の成すがままにされるアキラ。両者の力関係は、歴然だ。

「まったく、ヒーロー気取りで無茶ばかりして……自分が公務員だという事を、少しは自覚してもらいたいです」

「え？ 宇宙刑事ってやっぱり公務員なの？」

「ええ。戦闘の際も、いちいち本部に連絡して、出動予算の承認を得ないといけません。小さな事件では、コンバットスーツの着用にも制限が出ます。ですから、いつもアキラはヘルメットだけで出動しているのです」

その姿に似合わず、はきはきと話す少女。

「私は監査役として、アキラの行動の全てを監視しなければなりません。ですから、いい加減な彼の態度には、いつもうんざりさせられるのです」

ため息ひとつ、コーヒーを口に含む。弥生はこの少女に、同情の念を抱いていた。確かにアキラを相手にしては並の神経では持

たないだろう。

「俺はいい加減ではない。常に正義のために……」

「その考え方がいい加減だというんです。馬鹿ちゃん」

「ぱちんと頭を引っぱたく。年下の少女に好きにされる男というのは、どうにも情けなくて仕方がない。」

「とにかく、今後は私の監査も厳しくします。ただでさえ地球への宇宙刑事の派遣は予算の無駄遣いとしてせつつかれているのですから。結果を確実に出してもらわないと、本部への帰還という事になるかもしれません」

「それは困る。俺にはまだ地球の平和を守る使命が……」

「使命もへつたくれもありません。必要なのは結果です。いいですか、そもそも……」

長くなる少女の口上。辟易しているようなアキラ。そんなふたりを眺めながら弥生は黙って昼食をとるのだった。

「それでは、しっかり私の言った事を覚えておいてくださいね」

「フユリスはことさら念を押すと、アキラの部屋へと戻っていく。」

「あれ、帰るなら玄関じゃないの？」

「この部屋の押入れと、衛星軌道上のハイペリオンとをワームホールで直結しました。いつでもアキラの事を、修正しに来られるように」

「何でもないことのように、弥生の質問に答える。アキラは完全にこの少女に尻に敷かれてしまっているようだ。」

「それでは、失礼します」

押入れに入っていく。そしてピシャリと戸が閉まると、アキラは大きく息を吐いた。

「ふいー、やつとうるさいのがいなくなったか……」

「そんな事言ってもいいの？ 仮にもあなたの監視役なんですよ？」

「それは違うぞ弥生ちゃん。俺はひとりでもこの地球を守る！

フユリスなんて……」

「フユリスなんて、何ですか？」

「そう、フユリスなんて口うるさいだけの子供で、正義のなんたるかも知らない……」

気がつくと、押入れの戸が僅かに開き、そこから少女が顔を覗かせていた。

「……フユリス、今は、その」

「減俸三ヶ月」

ピシヤリと戸が閉まる。頭を抱えるアキラを見て、弥生はやれやれと首を振るのだった。



**第三話：パートナーは空の上から（後書き）**

メイン(?)（ヒロイン登場の巻。

ここからラブにコメって行く予定。

#### 第四話：商店街は戦いに揺れて

昼下がりの商店街。そこを、両手に大きな袋を抱えたアキラが歩いていく。

正義の味方というもの、常に世のため、人のため。そんな訳で、彼はお使いも進んで引き受けるのだった。

「ふむ、後はニンジンと玉葱とジャガイモ……」

手書きのお使いメモ。真由美の直筆で、『お願いね』と記されている。頼りにされては、アキラも張り切るといふものだ。駆け足で八百屋に向かう。

「おっさん、このメモに書かれている物、全部くれ！」

「あいよ、毎度ありー！」

一文字アキラ、値切りはしない主義。これで買い物の残りは肉屋で買うものだけになった。更に重くなった袋を抱え、肉屋へ向かう。そこに、背後からかかる声。

「待ちな兄ちゃん、たくさん買ってもらったから、これ持ってけ！  
八百屋の親父から手渡される紙切れ。」

「何だ、これは？」

「福引券だよ。ほれ、そこでやってる……」

親父の示す方を見れば、人だかりができていく。傍らの看板には大書で『花丸商店街 大感謝福引大会』と書いてある。

アキラの中の闘争本能に、火が灯る。これで一等を当てれば、真由美さんも大喜びだ。晩御飯も特盛りサービスになるかもしれない。

早速福引券を片手に、意気揚々とそこへと……。

「おっと、その前に肉を買わねば」

思い出したように振り返り、肉屋を目指す。その後ろ姿を、ひとりの妖しげな男が眺めていた。

「くつくつく、ブレイバーめ、貴様の好きにはさせんぞ……」

肉屋での買い物も終わり、アキラは福引所へ向かう。すでに長蛇の列ができている。その最後尾に、荷物を抱えたまま並ぶ。順番はきちんと守らねばならない。宇宙刑事の鉄則である。

やがて徐々に列は減り、もうすぐアキラの番になりそうだ。前の人々は、ことごとくハズレのティッシュをお持ち帰りしている。つまり、それだけ当たりに近いといっているということだ。

そしていよいよアキラの番が来た。腕まくりをし、準備万端整える。チャンスはただ一回。失敗は許されない、非情の世界だ。

「福引一回、いいところ頼む！」

「はい、どうぞ」

目の前には、艶やかに輝くガラポン。そのレバーは、いまや遅しと回されるのを待っている。そしてアキラは、ゆっくりとそのレバーに手をかけ……。

「ちよつと待てーい！」

背後からかかる、ちよつと待ったコール。振り返ると、そこにはひとりの男の姿。

「……何だ？ 俺は今忙しいのだ。用事なら後にしてくれ」

「そうはいかんぞー文字アキラ……いや、ブレイバー！」

「何者だ、貴様？」

男はゆっくりと着ていたコートを脱ぎ……その正体を現す。

その姿は、全身きらびやかな電飾に覆われ、ピカピカと光り輝いている。

そして腹に大きく一際輝く『大安売り』の文字。

「俺の名は、怪人マツキーヨ！ ブレイバー、貴様の命、貰い受け

る！」

「ちょっと待て、ひとつ聞きたいんだが……」

にじり寄る怪人に待ったをかけ、アキラはぼりぼりと頬を掻きながら、尋ねる。

「その電飾、どういう仕組みで光ってるんだ？」

「ふっふっふ、決まっているだろう。そのコンセントから電気を

……」

見れば、怪人の尻から延びたコードが、電気屋の中へと続いていく。

「……電気の窃盗じゃないか！」

「あれだけピカピカ光っているのだ、このくらい頂いても、問題無い！」

開き直る怪人に、アキラの怒りに火がつく。

「許せんぞ怪人！ 電気を大切にと、あれほどコマールシャルされているというのに！ この俺が、成敗してやる！」

「面白い。さあ、かかって来い！」

ふたりが戦闘体勢に入る。その時、突如プツンとマツキーヨの電飾が消えた。

「……駄目だよ、君。うちのコンセント勝手に使っちゃ」

コンセント片手に出てくる、電気屋の店員。

「あ、どうもすみません」

ぺこぺこと謝る怪人。電飾が消えると、すっかり地味になった上に、性格までおとなしくなってしまった。

「とりあえず、行くぞ怪人！」

「あ、でも、ちょっと待って……コンセント差さないと……」

しかしアキラは聞く耳も持たず、先制のパンチを繰り出す。

「断罪パーンチ！」

ゲブラツと情けない音を立てて吹っ飛ぶ怪人マツキーヨ。そして、吹っ飛んだ先はスーパールの特売コーナーの前。

『さあさ、ただいまから本日のタイムサービスだよー！』

店員のアナウンスに、我先にと殺到する主婦達。

ぐしゃ！ めきよ！ げしっ！

哀れ、怪人は恰幅のよろしい主婦達に踏み潰され、ズタボロになっ  
てしまった。そして、とどめに小錦級のおばちゃんの高いヒール・  
アタック。

チユドーン！ 怪人は大爆発し、周囲のおばちゃんを吹き飛ばし  
て消え去った。

「悪は滅びた……さて、福引だ」  
気を取り直したように、ガラポンへと向かうアキラ。そして渾身  
の力を込めて、レバーを回し始めた。

ぐりんぐりん……激しい回転。ガラガラと音を立てる玉。

「ぬおおおお……そこだっ！」

ピタリと回転を止める。そして一瞬の静寂の後、ころりと転がり  
出る玉。

「……」  
はっぴを着た、店員。その口が、ゆっくりと開かれる。

「うおめでとうございまぁーす！ 一等、温泉旅行ご招待ーー  
っ！」

カランカランとベルを打ち鳴らす。たちまちできる、人ばかり。

「うむ、これも俺の正義の心が、天に通じたからだな。はっはっは  
っ！」

勝ち誇ったように笑うアキラ。目録を手に、意気揚々と去ってい  
く。

その姿を追いながら、店員はガラポンを手にする。

「……あれ、空っぽ？」

「……ということは。」

「さっきのあれ、最後の玉だったのか……」

運が良いのか悪いのか。ともかく、プレイヤーは今日も大勝利を  
収めたのだった。

「……………」  
館の中、買い物に行かせた怪人の帰りを待つ少女。まさか怪人が、主婦の前に敗れ去ったとは、露ほども知らず。

「戻ってきたら、折檻ですね……………」

そのまま少女は、帰るはずの無い相手を待ち続けるのだった。

「たっだいまー！」

すばーん！

玄関をくぐるアキラに、容赦なく浴びせられるハリセン。

「……………遅いです」

そこには、フユリスがハリセンを構え、仁王立ちしていた。

「ちょ、ちよつと待て。何でお前がここにいるんだ？」

「あらあら、私が呼んだのよ？」

ニコニコと笑いながら、真由美が姿を見せる。無表情極まりないフユリスと比べると、まるで女神か菩薩のようだ。

「フユリスちゃん、いつもお空の上でひとりなんでしょ？ せっかくだから、ご飯とかはうちで食べてもらおうと思って」

実に優しい言葉をかける。心の中まで美しいとは、神も罪なものを創造したものである。

「早く上がってください。夕食が作れません」

少女に急ぎ立てられ、家上がる。材料を受け取った真由美は、鼻歌を歌いながら調理に取り掛かる。漂ってくる、スパイシーな香り。どうやら今日のメニューはカレーのようだ。

アキラ達はテーブルに座り、食事の時を待つ。

「ねえ、それって何なの？」

弥生がアキラの持っている物に気がつく。

「ああ、これは福引で当たった賞品だ」

「当たったって、一体何が？」

「何でも、温泉旅行の招待券らしいが……」

「え、ちよつと、嘘っ！」

目を白黒させる弥生。まさか、そんな事があってもいいものだろうか。ほっぺたをつねってみる。

「……痛いです」

ほっぺたをつねられたフユリスが、無表情で抗議の声をあげる。

「あ、ごめん……本当に、温泉旅行が当たったの？」

目録を受け取り、中身を改める。そこには間違いなく、温泉旅行の招待券。

慌てて弥生は台所の母親を呼ぶ。

「あら、どうしたの？」

「聞いてよママ！ アキラが福引で温泉旅行を当てたのよ！」

「まあ、それは素敵ね」

真由美の笑みを受けて、甲高く笑うアキラ。その頭をフユリスがハリセンでド突き、黙らせる。頭から煙を出して沈黙するアキラ。

「あらあら、でもこの招待券、五名様までって書いてあるわ」

招待券を受け取った真由美が読み上げる。家族で行ってもふたり。アキラを合わせても、三人。

「……そうだ、フユリスちゃんも、一緒に来ない？」

「……はあ」

いかにもいいことを思いついたかのように、真由美は微笑む。対照的に、無表情であっけに取られる少女。

「せっかくだから、みんなで行きましょうよ。大勢の方が、きっと楽しいわ」

「でも……私、仕事が……」

「たまにはお仕事も忘れて、ね？」

なおもためらいを見せるフユリスに、真由美は優しく語り掛ける。「それにフユリスちゃんは、アキラさんの事を見守らないと駄目な

んでしょ？ それだったら、一緒に温泉に行った方が、いいと思うわ」

その言葉に、黙って少女は頷く。こうして、四人が温泉に行く事が決まった。しかし、あとひとり、招待枠が余っている。

「どうしましょう……？ せつかくだから、行かないと勿体無いわ」  
困ったように小首をかしげる真由美。

「……あ、そうだ」

弥生が思いついたように声をあげる。

「どうしたの？」

「私の友達、誘ってもいい？」

「そうね。せつかくだから、誘ってみるといいわ」

真由美の承諾を得て、電話に駆け寄る弥生。しばしの沈黙の後、電話が繋がる。

「あ、瑞穂？ そう、私。でね、唐突なんだけど、一緒に温泉に行かない？」

楽しそうにお喋りする。相手は親友の松原瑞穂らしい。

やがて彼女は電話を切ると、指でオツケーのサインを出した。

そんな訳で、温泉旅行のメンバーは全て決まったのだった。



第四話・商店街は戦いに揺れて（後書き）

ドキドキへの前振り。

さて、そして温泉だ！

## 第五話：温泉湯煙旅情派地獄変

「ふわー、やっと着いたー！」

バスから降りた弥生は、大きく伸びをする。

ここは某県の山奥、ひなびた温泉街である。アキラが福引で当たった温泉旅行招待券。それを無駄にする理由もなく、五人はやって来たのだ。

身軽な開放感に溢れた装いで、バスを下りる四人の女性陣。その後から、全員分の荷物を背負った唯一の男、一文字アキラが続く。

『荷物持ちは頼れる男の仕事』とのせられて押し付けられた荷物。しかし、馬鹿みたいに力のあるアキラは、大して苦痛にも感じてはいないようだ。まさにタフガイ、女の尻に敷かれるために、生まれしてきた男。

「弥生ちゃん、本当に私がついてきちゃっても良かったんですか？」  
瑞穂が尋ねる。

「いいのよ。どうせタダなんだし、遠慮する事なんてないわ」

そんなふたりを、微笑ましそうに眺める真由美。その後は無表情で続くフユリス。

やがて一行は、一軒の旅館に辿り着く。老舗らしい風格を感じさせる佇まい。まさに温泉旅館の中の温泉旅館である。

中に入ると、早速女将が出迎えてくれた。

「ようこそ、いらっしやいました。ささ、お部屋へご案内します」  
女将の後に続き、部屋へと通される。和風でまとめられた部屋。窓からは美しい山並みが一望できる。

……しかし、ここでひとつの問題が持ち上がった。割り当てられ

た部屋は、ふたつ。そして、男はアキラひとりだけ。どう部屋割りをしたら良いものか。

女性陣で集まって、相談する。

「アキラと一緒にの部屋なんて冗談じゃないわ。ましてやふたりつきりなんて絶対イヤ！」

「あの、私も男の人と一緒にの部屋は、ちょっと……」

弥生と瑞穂はアキラと一緒にの部屋は反対のようだ。まあ、年頃の女の子というものは、そういうものなのだろうが。

「あら、それじゃあ私がアキラさんと一緒にの部屋にしようかしら」「それもダメっ！」

真由美がにこやかに言うが、即座に否定する。まったく危機感の欠片も無い母親に、弥生は呆れ果てる。

しかし、それでは誰がアキラと一緒にの部屋になるのか。最悪、彼ひとりだけ別の部屋という事になるのか。

その時、今まで沈黙を続けていたフユリスが口を開く。

「私が、アキラと一緒にの部屋でいいです」

一同は少女の方を見る。

「そうね……流石にアキラも、こんな小さな子に手は出さないわよね」

「それにフユリスちゃんなら、アキラさんの事もよく知ってるし……」

「私は、別々の部屋なら、何でもいいです……」

こうして、すったもんだの挙句、部屋割りは決まったのだった。

部屋に荷物を下ろし、早速一同は旅館の中を歩き回る。特に物珍しいものがあるわけでもないのだが、これも旅行の醍醐味というものであるう。

ぺたぺたと、板張りの廊下を歩く。

「ねえ、ここの温泉ってやっぱり露天風呂かな？」

「そうねえ。もしかしたら、混浴かもしれないわねえ」

微笑みながら、さらっと言う真由美。

……。

女性達は、一斉にアキラのほうを見る。

「変態！」

「……エッチ、だと思えます……」

「死ねば？」

投げかけられる、三者三様のきつい一言。

「俺が何をしたというんだ？」

「これからするんじゃないの、馬鹿！」

発端の真由美は、ニコニコとそんなやりとりを眺める。言葉の暴力で痛めつけられるアキラ。実に平和な温泉でのひと時であった。

結局、温泉は露天ではあったが、混浴ではなかった。辛うじてアキラは犯罪者にならずに済んだのである。

自室でござろごろとするアキラ。フュリスは何やら帳面を前に仕事をしている。

「フュリスも、こんな時くらい仕事を忘れるよ」

少女は無表情の中に、呆れたような顔を覗かせる。

「誰のおかげで、仕事が増えたと思っっているんですか。アキラが毎回余計な事に出動するから、余計な出費が増えるんです。誰が本部に報告して、予算を回してもらっているか、分かりますか？」

「必要経費だろ？」

少女はため息ひとつ。

「川で溺れている子猫を助けるために、わざわざスーツを着装する人が、どこにいるんですか？ 他にも、酔っ払いの喧嘩の仲裁、街頭のゴミ掃除、お婆さんの荷物持ち……どこに必然性が？」

「このハートに、燃える正義があるからだっ！」

フュリスは無言でポケットから小さな何かを取り出す。そしてブーンと腕を振ると、それはハリセンに姿を変える。宇宙芸人御用達、

持ち運びに便利な携帯ハリセン。

スパーンツ！

部屋に響く小気味よい音。彼女の苦勞は、まだまだ続きそうであった。

そして日が暮れて。

「フュリスちゃん、お風呂に行くわよー？」

ノックと共に、真由美が顔を覗かせる。帳面を前に難しい顔をしていたフュリスも、その声に入浴道具をまとめて後についていく。頭から煙を出して倒れていたアキラも、むっくりと起き上がり、入浴の支度を始める。

「この温泉は、打ち身には効くのだろうか……」

頭を撫でながら、部屋から出る。少なくとも、馬鹿は治るまい。長い廊下を歩き、目的の場所へと辿り着くアキラ。暖簾の下がった入り口。大きく『男』『女』と書かれている。

勿論、アキラはお約束のように男湯と女湯を間違えたりはしない。ジェントルマンである。実にサービス精神の足りない男だ。

服を脱ぎ、奥へ進むと、視界が真っ白な湯気で覆われる。そして一陣の風と共にそれが晴れると、目の前に広がる広い露天風呂。

「……うむ、こうでなくてはな」

早速かけ湯をし、湯につかる。大きく伸びをし、手足を伸ばす。

この開放感こそ、露天風呂の醍醐味であろう。

再び風が吹き、湯煙がたなびくと、その向こうにひとつの影。どうやら先客がいたらしい。

「ふははは……ようやく現れたな、ブレイバー」

「何だと、何者だ貴様？」

その問いかけに、影はざばあと湯を溢れさせて、立ち上がる。

「俺は温泉怪人ノポリベーツ……」

そこまで言うとは、怪人はざばあんと湯の中にぶっ倒れる。

「……………おい、大丈夫か？」

アキラはぶかぶかと湯に漂う怪人に声をかける。ややあって、怪人はふらふらと立ち上がった。

「おのれブレイバー……………貴様がなかなか来ないから、すっかり湯当たりしてしまったではないか……………」

「温泉怪人の癖に、湯当たりするのか」

看板に偽りありとは、この事であろう。しかし、そんな事にはお構いなく、ノボリベーツはファイティングポーズをとる。

「勝負だ、ブレイバー！」

「いいから、前を隠せ。見苦しいものをぶらぶらさせるな」

戦う前から、ブレイバー・げんなりモードである。そもそもくつろぎに来たのに、何故戦わなければならないのか。勝負ならば他の所でもいいだろうに。

「分かったから、後で相手をしてやる。湯から上がったら旅館の前で待っている」

「今ここでなければ意味が無い！ 尋常に勝負だ！」

説明しよう。温泉怪人ノボリベーツは、湯につかっている事によつて、その能力を何倍にも高める事ができるのだ！

「いわばここは俺のホームグラウンド。貴様に勝ち目は無いぞ、ブレイバー！」

「いいからタオルでも腰に巻け。非常に不愉快だ」

構わずノボリベーツはシュツシュとパンチを繰り返す。仕方なくアキラも腰にタオルを巻き、立ち上がる。

「俺の憩いのひと時のためにも、すぐに終わりにしてやる。瞬着！」

……………。

「瞬着！」

……………。

しかし、コンバットスーツは転送されてこない。ヘルメットすら、影も形も無い。

「……はっ、そういえばフュリスもここに来ているのか!？」

承認を得てスーツを転送してくれるフュリスがここにいるという事は、いくら叫んでもコンバットスーツは転送されてこないのだ。

「どうしたブレイバー、かかってこないのならば、こちらから行くぞ!」

怪人は湯船からジャンプし、両足を揃えて飛び蹴りを仕掛けてくる。

「なんの、断罪ガード!」

両腕をクロスさせ、その蹴りを受け止める。

「たとえスーツが無くとも、俺は負けん! 行くぞ怪人!」

かぼーん……

「うーん、気持ちいいー」

弥生はゆっくりと湯の中で伸びをする。ここ、女風呂には綺麗どころが四人も勢ぞろい。

お見せできないのが、実に残念である。

「それにしても、弥生も色々と成長したわねえ……」

真由美が弥生の姿を眺めて、そう感想を漏らす。そう言う真由美は、実にダイナマイトなボディーをしているのだが。まさにばいんばいんである。

「いいなあ……私も、弥生ちゃんくらいスタイルが良ければなあ……」

……

しみじみと瑞穂が呟く。

「そう言う瑞穂だって、お肌すべすべだし……それに胸だって、いつかは大きくなるわ」

「そうかなあ……」

「なんだったら、私が揉んで大きくしてあげよっか?」

「きゃ、ちよっと弥生ちゃん!」

「……何やってるんだか」

ひとり静かに、フユリスは湯につかっていた。

「ばしゃーん！ ざばーん！

すると、男湯の方がなにやら騒がしい。

「あらあら、どうしたのかしら？」

「きっとアキラが、ひとりで大騒ぎしているんでしょ？」

何でもないことのように、フユリスが答える。

「どばーん！ ばしゃーん！

「あの馬鹿、静かに入浴もできないのかしら」

「だから馬鹿なんです」

「メキメキ……ピシッ！」

「……なに？」

突如として、男湯との境目の板壁にヒビが入る。そしてそのまま大崩壊。破片と共に女湯に飛び込んでくるふたつの影。

「おとなしく死ねっ、ブレイバー！」

「何の、俺は負けない！」

……。

気がつけば、ふたりを囲む裸の女性達の姿。静寂が辺りに満ちる。

「……き」

「「きゃああああ！」」

タオルで身を隠し、手当たり次第に辺りの物を投げつける女性達。

「ちょ、待てっ！ これはアクシデントだ！ いててっ！」

「このド変態！ 死になさいっ！」

弥生の投げた桶が、顔面にヒットする。もんどりうって倒れるアキラ。

「そのこのアンタも、地獄に行け！」

怪人に襲い掛かる、飛来物の嵐。もう、ボコボコである。

「……おのれえ、この温泉怪人ノボリベーツによくも……！」

その怪人の前に、無表情で立つフユリス。その手には、ハリセン。

「死ね、変態」



ドバチーーン！

猛烈な一撃を受けて、垣根を越えて外に吹っ飛んでいく怪人。そして、爆発。

……こうして、実にあっけなく悪は滅びた。……アキラと共に。

そして結局女性陣は、旅行が終わるまでバリバリに敵意を燃やしていた。アキラにとって、この旅行は骨休みにはならないのだった。

**第五話：温泉湯煙旅情派地獄変（後書き）**

というわけで、サービスもあまり無い内容  
とほほ。でも感想待っています。

## 第六話：小さな君に、小さな愛を

静かな闇の中、地球に向かう、一隻の宇宙船が存在した。

「……フュリスよ。今、迎えに行くぞ……」

スパパーンッ！

今日も今日とて、少女は容赦ない一撃をアキラに加える。

「バニラのアイスって私は言ったのに、何でチョココメントなんか買ってくるんですか、この馬鹿ちゃん」

「いや、バニラ売り切れで……チョココメントも美味しいぞ、な？」

スパパーンッ！

もう、やりたい放題である。これほどまでにハリセンの似合う少女もいないであろう。

そんな少女に、アキラはまったく頭が上がらない。宇宙刑事とはいえ、こんな事でいいのだろうか。

正直アキラとしても、もうちょっとおしとやかな人にサポート任務についてももらいたいと思う。しかし、深刻な人材不足である宇宙警察は、わざわざこんな辺境の惑星に送り込む優れた人材などはいないのである。

そんな訳で、三流宇宙刑事と無表情氷面冷血殺戮少女がコンビを組んで、地球の治安を守っているのだ。

「罰として、アキラのチョコアイスは私が頂きます」

「いや、そうすると俺の食う分が……」

「うるさい」

少女の言葉は絶対だ。さすがごとアキラは引き下がる。食い物の恨みは恐ろしいが、この少女を怒らせる事の方が、もっと恐ろしい。アキラは庭に出ると、いちにのさんしと体操を始める。ストレスは、体を動かして発散するに限る。間違つてフユリスにぶつけようものなら、三倍返しではきかないのだ。

「おいっちにーさんしつと……ん、何だ？」

突如として、巨大な影が辺りを覆う。天候でも崩れたのだろうか。空を振り仰ぐと、そこには巨大な何か。

「宇宙船……なのか？　しかし、これほど大きなものが、地球圏のような辺境に、何をしに来たというのだ？」

ピピ、ピピピ……

アキラの腕時計型無線機に、着信が入る。

「一文字アキラだ。誰だ、公用無線に割り込んでくるのは？」

『……ワシはグレイ・アースランド。ここに、娘を迎えに来た』

「娘、だと……？」

『そう。ワシのひとり娘、フユリス・アースランドの事だ』

空中に浮かぶ巨大な宇宙船。その中に、アキラとフユリスは招かれていた。廊下には衛兵が並び立ち、物々しい雰囲気である。

廊下を抜け、巨大な広間に出る。豪華な装飾、赤いカーペット。まるで、王宮にでも迷い込んだかのような錯覚を起こさせる。アキラには少々場違いな感じた。

広間の中央の大きな椅子には、ひとりの恰幅のいい男が座っていた。フユリスが入ってくるのを見ると、立ち上がり、大きく手を広げる。

「おおフユリスよ、待ちかねたぞ！」

「……」

そんな男を、冷めた目で眺める少女。

「こうして会うのも久しぶりだな、我が娘よ。お前が勝手に宇宙警察、しかもこんな辺境の地に赴任して以来だ」

その男、グレイ・アースランドは実に芝居のかかった動きで、感動を表現する。しかし、フユリスの方にはまったく感動の欠片も無いようだ。久しぶりの再会というのが本当ならば、父親に対してこんな態度はとらないだろうに。

グレイは椅子の元から、ゆっくりと娘の下へ歩み寄る。そしてフユリスの手をとり、感極まったように涙を流す。

「……それで、私に何の用ですか、お父様」

「うむ、積もる話もある。まずは別室でゆっくりとくつろぐがいい。……ところで、あの男は何者だ？」

アキラの方を、不振な者でも見るかのような目で眺める。

「彼は私のパートナー、宇宙刑事の一文字アキラです」

「ふむ、そうか貴様が……貴様は、もう下がってもいいぞ」  
「何だと？」

グレイは唇の端で、にやりと笑う。

「もう貴様は用済みという事だ。分かったらさっさと立ち去れ」

「どういうことですか、お父様？」

「お前がもうこんな仕事を続ける必要はない。今日限りで、お前はまたワシと一緒に暮らすのだ。そのために、ワシはお前を迎えに来たのだから」

「そんなこと、勝手に決めないでください」

グレイはパチンと指を鳴らす。すると大勢の武装した男達が現れる。そしてアキラとフユリスを隔てるように、周りを取り囲む。

「ワシの決定に逆らう事は、誰であろうと許さん。たとえば、宇宙刑事といえどもな」

アキラは何とか囲みを突破しようとする。しかし、武装した男達を前に、迂闊に動く事もできない。

グレイはフユリスの手を引くと、歩き出す。逆らうフユリスだが、

ずるずると力任せに引きずられていく。

「一文字君を、丁重にお送りしろ」

男達が、アキラを掴んで引っ張っていく。

「グレイ、貴様は一体何なんだ！」

「ワシは、宇宙統合政府議員グレイ・アースランド。去れ。そして二度とワシの娘に近づくな」

宇宙船から放り出され、アキラは呻いていた。放り出される時に抵抗し、暴力でもって押さえ込まれたのだ。

親が娘を迎えに来た。それならば、このまま黙って行かせた方が良いのだろうか。しかし、フュリスは、あの小さな少女は明らかに嫌がっていた。それをグレイという男は、無理やりに……。

だが、自分になにができる？ 相手は議員、そして肉親。それに対する権利が、自分にあるのか？

「俺の出る幕じゃ、ないのかもな……」

ぼそつと空に向けて呟く。なぜか少し、胸が痛んだ。

「……あら、フュリスちゃんは？」

夕食の席、真由美がアキラに問いかける。いつも席についている少女の姿が、見えないから。

「あいつは、親の所に帰ったよ」

「親って、あの空に浮かんでる宇宙船の所？」

弥生の言葉に、黙って頷く。

「とにかく、このままでは地球の平和が守れない。本部に連絡して、代わりのパートナーを派遣してもらおうか」

予想以上に落ち着いた様子のアキラに、弥生は不満そうな顔を見せる。今までのパートナーを、あっさりとその男は切り捨てるのか。ふたりの関係は、その程度のものだったのか。

フュリスの事を思い浮かべる弥生。無表情で、無愛想で、毒舌家

で、なにを考えているのか分からない子だったけれど、それでもしばらく生活を共にしてきたのだ。

それを、この男は……。

「あなた、それでいいの？ 本当にあの子がいなくても平気なの？」

「ちよつと、もう少し愛想のいいパートナーが欲しいと思っていたところだ。いいチャンスさ」

パシーン！

弥生は目を見張る。いつもにこやかで温厚な母、真由美がアキラに平手打ちを浴びせたのだ。

「ちよつと言い過ぎよ、アキラさん？」

呆然と真由美の顔を見るアキラ。自分に何が起こったのか、分かっていないかのように。

真由美は手をさすりながら、ゆっくりと語りかける。

「本当に、そう思っているの？ アキラさんとフユリスちゃんは、なんて言うのかしら、気持ちを通じ合っていると思っていだけれど、違うの？」

「俺は……力しかない馬鹿だ。だけど、子供が親に従わなくちゃいけないっていう事は、分かっているつもりだ」

「それは違うわ」

真由美はじつとアキラの瞳を覗き込み、話を続ける。

「子供は親の道具じゃないの。親は、ただ子供の事を温かく見守るのが役目。不必要に干渉する事は、たとえ親や肉親であっても、絶対に許されないわ」

アキラは黙って席を立つ。

「後悔だけは、しないようにね？」

真由美達は、去っていくアキラの背中を、ただじつと見送った。

屋根の上。夜の闇に包まれたそこを、心地よい風が吹きぬける。

ただ黙って、屋根の上に横になっているアキラ。

さつき真由美に言われた言葉を、反芻する。

『アキラさんとフユリスちゃんは、気持ちを通じ合っていると思っ  
ていたけれど……』

そんな事はない。フユリスは基本的に他人に無関心で、誰にも心なんて開くとは思えない。

ましてや、こんな自分だ。彼女にとっては、厄介者にしか過ぎないはずだ。信頼も、尊敬も、自分に向けられるはずはない。今までパートナーでいられたのは、奇跡だ。

だから、彼女が幸せになれそうならば、黙って見送るのが、自分にできる最大の感謝だ。

……そのはずだ。

宇宙船はまだ、街の上空に留まっている。さつさと宇宙へ飛び立たないのは、何か訳でもあるのだろう。

ぼーっと夜の空に浮かぶそれを眺めるアキラ。

考えてみれば、ここに居候するまで、フユリスはずっと衛星軌道のハイペリオンにひとりでいたのだ。それがアキラがここに住むようになって、僅かずつとはいえ顔を合わせるようになった。

ひとりで宇宙にいるというのは、どんな気持ちなのだろう。サポートのためとはいえ、宇宙船に籠り、当たり前前の少女の生活すら、送れないということ。

もし、彼女の心が傷ついているとしたら、それは自分のせいだ。

あの少女はたとえどんなに傷ついても顔には出さないだろうが、そういう性格にしてしまったのも、自分の責任ではないのか。

自分にできる罪滅ぼしは、無いのだろうか……。

ピピ、ピピ……

アキラの腕の無線が鳴る。表示は直通。つまりはたったひとりの特定の相手から、フユリスからだ。

『……聞こえます、アキラ？』

「ああ、よく聞こえる」



『……ごめんなさい、あんな目に遭わせて』

「ごめんなさい？ あの少女が、自分に謝っている？ 今までそんな言葉、一言も聞いた事が無いというのに。」

「どうだ、そっちは。良くしてもらってるか？」

『過保護すぎます。部屋から一歩も出してもらえないし』

なるほど、あの父親ならそのくらいの事はするかもしれない。

『アキラは、私がいなくても、大丈夫ですか？』

「ああ、静かで快適だ。もうぼんぼん叩かれる事も無いしな」

『あれは羨です。アキラがどうしようもない人だから』

思えば、あれは少女なりのコミュニケーションだったのかもしれない。不器用な少女なりの、精一杯の。

『……たぶん、もうアキラとは会えないと思います……』

「そうか……」

沈黙が満ちる。無線越しに伝わる、少女の息吹。そして……。

「お前……泣いてるのか？」

『そんな事、ありません……』

しかし、確かにアキラは感じるのだ。僅かな悲しみの感情を。あのフユリスが、これほど感情をむき出しにする事なんて、今までに無かった。だからこそ、余計にはつきりと感じる。

「……何があつたのか、話してくれるか？」

『何にも無いです……』

「フユリス、俺達はパートナーだ。もうお前はそうは思っていないかもしれないが、それでも腐れ縁だったんだ。話して、くれないか？」

再び沈黙が続く。無線の向こう、戸惑いが伝わってくる。

……どのくらい時が過ぎたろうか。微かに、言葉が届く。

『結婚……させられそうなんです』

「何だつて？」

『政略結婚……財閥の、御曹司と』

「でもお前、まだそんな年齢じゃないだろう？」

『今は婚約だけ……でもいつかは、そうなります』

あの父親は、自分の娘を政治の道具にしようとしているのか。アキラの心の中に、激しい怒りが湧き上がってくる。

『こんなの、嫌です……お願いアキラ、私を助けて……』  
プツン。

無線が途絶える。アキラは屋根を駆け下りると、玄関に向かう。

「あら、どこかにお出かけ？」

真由美が足音を聞いて、顔を出す。

「小さな女の子が、泣いているんです。震えて、助けを待っているんです。俺が、助けてやらなくちゃ……いけないんです」

「そう、頑張つてね？」

真由美に見送られ、アキラは飛び出す。

ちっぽけな、ただひとりの少女のための正義。けれどもそれは、今の彼にとって何よりも大事なもののだ……。

宇宙船の中、部屋に閉じ込められた少女。鍵は外からかけられ、出る事もかなわない。

自分は、さつき何を言ってしまったのだろう。アキラに迷惑をかけることなんて、できはしないのに。そんな権利は、自分にはないのに。

自分はいつも、彼に酷いことをしてきた。心を開く事も無く、馬鹿な相手と見下して。そんな自分が、彼に何かを頼む資格はないはずだ。

それなのに、自分は何を期待しているのだろう。来てくれる保障はない。こんな可愛げの無い子供の事など、心配してくれる人なんて、いやしない。だけど、もしかしたら。そんな僅かな期待。

その時、遠くからサイレンの音が聞こえてくる。ドアに駆け寄り、耳を当てる。

『……船内に侵入者！ 直ちに発見し、排除せよ！』

間違いない、彼が来たのだ。本当に、バカで、無鉄砲で、どうしようもなく……そして、強い人。

フユリスは扉の前で待つ。彼が来てくれる事を、信じて。

……………。

アキラは長い廊下を走っていた。フユリスの居場所は、無線機の僅かな電波を追っていけば分かるはずだ。それに、警備の厚い方向かえば、必然的に辿り着くはず。アキラは馬鹿だ。だから、馬鹿にしかできない方法をとるのだ。

目の前に、ふたりの警備兵。相手が銃を構えるよりも早く、突撃してひとりを殴り倒す。怯む残りのひとり。そこへ回し蹴り。銃を蹴り落とす。

「フユリスの所へ、案内してもらおうか？」

銃を拾い上げ、突きつける。恐る恐る歩き出す警備兵。やがて、ひとつのドアの前に辿り着く。

「よし、ご苦労さん！」

拳を一閃、警備兵を殴り倒す。そして鍵を開け、ドアを開く。

「よう、助けに来たぞ、フユリス」

「アキラ……………」

瞬間、アキラの体に体重がかかる。何が起こったのかわからないアキラ。そして、気がつく。少女が、自分に抱きついていている事を。そして、その小さな肩が小刻みに震えている事を。

ぼんぼんと、優しく背中を叩く。それで大分落ち着いたのか、フユリスはアキラから離れる。その顔は、涙で濡れていた。そう、この子は少女なのだ。外見どおりの、小さな少女なのだ。その中身が、どれほど繊細なのか……………。

そつと涙を拭ってやり、手を繋ぐ。

「一気に出口まで走るぞ。脱出ポイントくらいはあるはずだ」

「……………うん」

並んで通路を走る。背後から聞こえる、追っ手の足音。戦うわけ

にはいかない。ふたりがここにいる以上、コンバットスーツの転送はできないのだ。生身で戦うには、相手はあまりにも多すぎる。

追っ手をまきながら走る。しかし、広い船内、次第に追い詰められていく。

「アキラ、危なくなったら、私を捨てて逃げてください」

「それはできない。正義が悪に屈するわけにはいかないからな！」

本当に、馬鹿な男。でも、そんな彼が今はなんだか頼もしいと思うフユリス。

やがてふたりは、袋小路に辿り着く。完全に追い詰められてしまったのだ。振り返ると、兵士達に守られたグレイの姿。

「ワシを困らせるな、フユリス。その男から離れて、ワシの元へ来い。そうすれば、その男の命だけは助けてやろう」

戸惑うフユリス。自分が行けば、アキラは助かる。だったら……。

「アキラ、私行きます」

そう言って、父親の方へと向かおうとする少女の腕を掴むアキラ。「行くな」

「でも、私が行けば……私が犠牲になれば……」

アキラはしっかりと少女の瞳を見据える。そして。

「お前は、俺のものだ。どこにも行かせない」

「えっ……」

突然の言葉。何の心構えもできていなかった少女に、その言葉は突き刺さる。

「生きるのも死ぬのも一緒だ。お前をもうひとりにはしない」

フユリスはその言葉に、覚悟を決めた。なんとしても、彼と生き残るのだ。そのためには……。じりじりと迫る包囲の輪。

「アキラ、後ろの壁のハッチを開けてください」

「しかし、これは緊急用のハッチだ。開けてもそこには何も無いぞ？」

確かに外には出られない。しかし、この船は空高く浮かんでいるのだ。外に出ても、墜落するだけである。

「アキラ、私を信じてください！」

珍しく強気な少女の言葉。だから、アキラも覚悟を決めた。

後ろ手にハッチを開ける。吹き込んでくる強風。

「お父様。私はやっぱりあなたにはついていけません。ずっと前から、あなたの事は嫌いだったから。だから、私はアキラと行きませぬ。もしも、これ以上追いかけてくるのであれば……私は、舌を嚙んで死にます」

アキラにぎゅっとしがみつき、外へと踏み出す。

「この馬鹿娘がっ！」

グレイの声が、むなしく響く。そしてふたりは、何も無い空中へと飛び出していた。

真っ直ぐに、落ちていく。その強い空気の抵抗の中でも、フュリスはアキラの事を離さなかった。服越しに、鼓動を、暖かさを感じる。ああ、この信頼できる人というものは、こうも気持ちのいいものだったのか。人との触れ合いを避けてきた少女が、初めて感じる心地よさ。

「落ちてるけど、どうするんだ？ 心中するつもりじゃなかったんだろ？」

「ええ、そうですね」

フュリスは腕の小型端末のスイッチに触れる。船内では妨害されていたが、外に出た今ならば。

「飛びます！」

キュインツッ！

僅かな音と光と共に、ふたりの姿は消え去った。

ドシーンツッ！

大きな音を立てて、何かがアキラの部屋の押入れに飛び込む。居間でアキラの帰りを待っていた真由美と弥生は、慌てて部屋の様子

を見に行く。

そこには、押入れを開いて出てくるアキラとフユリスの姿。

「良かった。無事だったのね、ふたりとも」

真由美が微笑みながら言う。

「心配するだけ無駄よ。アキラが簡単にどうにかなるわけがないでしょ」

そう言いながらも、弥生はどこか安心したような顔をしている。

「それにしても……ふたりはいつの間にも、そんなに仲良しになったの？」

弥生の言葉に、改めて自分達が抱き合っている事に気がつく。顔を赤くして、慌ててアキラから離れるフユリス。アキラは笑いながら『俺達はいつでも仲良しさ』などとうそぶく。

「ふふっ……ふたりとも、お帰りなさい」

「ただいま、真由美さん、弥生ちゃん」

「……」

赤い顔をして、うつむく少女。

「ほら、フユリス？」

「……ただいま」

「はい、お帰りなさい」

こうして、ふたりの長い一日が終わった。

**第六話・小さな君に、小さな愛を（後書き）**

始終こんな感じですよ（汗）  
では、この先をお楽しみに！。

## 第七話：あの人に、この思い届け

暦の上では、まだまだ冬。しかし、微かに春の足音を感じさせる季節。それが、二月。

学校から帰ってきた弥生は、台所に飛び込んだ。そこに母親がいるはずだから。しかし、そこには誰も居らず、ただ書置きが一枚だけ。

『大事なお買い物に行ってきます。弥生も、そろそろ準備しておいた方がいいわよ』

……何のことだろうか？

準備といわれても、さっぱり訳が分からない。ふとカレンダーを見ると、三日先に丸印がつけてある。

「……あ、そっか……」

成る程、真由美はこれのために出かけたのだ。理由が分かれば、何となく力が抜ける。いい歳をしてこういうイベントではしゃぐというのは、どうかと思うが。

弥生は二階の自室へ向かう。どうせ自分には関係の無い事だ。相手もないことだし、特に気にする事も無いだろう。……だが、真由美は相手がいるのだろうか。まさか、あの男に？

「本命のはずはないと思うけど……」

あの母親のことだから、絶対にありえない事ではない。父親は単身赴任中であるし、もしかすると『若いツバメさん』などと浮かれている可能性もありえる。

そんな早まられても、困る。ここはなんとしても、阻止しなければならぬ。でも、どうやって？



「とりあえず、商店街に行ってみよう……」

真由美を見つげ出して、馬鹿な事はしないように言い含めなければならぬ。何故自分がこんなに疲れる事をやらねばならぬのか理解に苦しむ弥生。

制服も着替えずに、外へと飛び出す。目指すは商店街の、専門コーナー。

きっと母親は、そこにいるはずだ。

弥生は覚悟を胸に、商店街へと足を向けた。

……

その日フュリスは、いつものように早乙女家で朝食を頂いていた。隣には、がつがつと食事を取るアキラの姿。あの事件以来、妙に気恥ずかしくて、なかなか彼と顔を合わせることができない。

あの時の言葉を思い出す。

『お前は、俺のものだ』

……これは、言ってみれば告白ではないのか？ そう思うだけで、顔が赤くなっていくのが分かる。アキラが、自分に告白……。

「どうしたフュリス、食べないなら、俺が食っちゃまうぞ？」

真つ赤な顔を、アキラに見られるフュリス。

「なんだ、風邪でもひいたのか？ 顔が真つ赤だぞ」

そのまま彼は手を伸ばす。ぺたり。額に当たる手。ひんやりと冷たいそれ。

ぼんっ！ ますます少女の顔は赤くなる。

「な、なんでもありません！ 気にしないでください！」

慌てて彼の手を引き剥がすフュリス。そんな様子を、ニコニコと眺める真由美。結局、朝食が終わるまで、フュリスの顔は真つ赤なままだった。

朝食の時間も終わり、弥生は学校へ。アキラは街のパトロールに出かける。フュリスも宇宙巡洋艦ハイペリオンに戻ろうと、アキラの部屋の押入れに潜り込もうとする。

しかし、そんな少女を引き止める声。

「フユリスちゃん、ちよつといいかしら？」

「なんですか、真由美さん？」

笑顔の真由美。そつとフユリスに近づくと、耳元に囁く。

「あの人のこと、好き？」

「……ほんっ！」

たちまち紅葉のように、顔を赤くするフユリス。

「あらあら、顔がまっかつかね」

「ちょ、ば、馬鹿なこと、言わないでください！ 私があのアキラを好きですって？ 冗談もほどほどにしてください！ 大体、あんなバカでどうしようもなく、食欲だけは人並み以上、くだらない事に正義を振りかざして突撃する正義馬鹿、正義マニア、いいえ、正義オタクに、何で私が好意を持つなんて考えるんですか。馬鹿げてます。もう呆れ果てます。そもそも私は好みはうるさいんです。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い、はつきりしているんです。

あんな暑苦しい人、願い下げです。もしもあの人がまともな思考を持っていたとしても、それでも却下です、不許可です。それに……」

少女の長い語りを遮って、真由美は意地悪そつに微笑む。

「アキラさんの事だなんて、一言も言ってないわよ？」

「あ……」

自爆である。おまけに墓穴まで掘っている。言い訳のしようもない。真っ赤な顔で、フユリスはうつむいてしまう。

「それでね、フユリスちゃん。そんなあなたに、ちようどいいイベントがもうすぐあるのよ？」

「イベント、ですか？」

「そつ、地球の独自のイベントだね。好きな人に、プレゼントをするの」

「わ、私に好きな人なんて、いません！」

精一杯主張してみても、もう後の祭りである。そもそも真っ赤な顔で言っても、説得力が無い事甚だしい。

真由美はカレンダーの前に、少女を連れて行く。そこには、ある

日付の上に印がつけてある。それが、イベントの日らしい。

「三日後ね。ちょうど今から準備を始めれば、間に合うと思うわ」  
フユリスの反応も気にせず、一方的に語りだす。フユリスは何とか真つ赤な顔を元に戻そうと四苦八苦。

「それでね、後でお買い物に行くんだけど、良かったらフユリスちゃんも一緒に来ない？ それで、アキラさんに日頃の感謝を込めて手作りのプレゼントを用意するの」

「私は……その、そういうのは苦手で……」

「大丈夫。私が手取り足取り、教えてあげるから、ね？」

強気に押してくる真由美。防戦一方のフユリスはタジタジである。

「きつとアキラさんも、喜んでくれるわ。それでふたりの中でも、一気に大接近よ」

「……」

少女は考える。好きとかはどうでもいい。自分には関係の無い事だ。しかし、あの時自分を助けに来てくれたお礼は、しなければならぬだろう。そういう事ならば、これはチャンスかもしれない。唐突に礼をするよりも、こういうイベントを利用した方が、言い訳が立つというものだ。

そして少女は決心する。

「よろしく、お願いします……」

「ふふっ、任せてちょうだい」

朝から一文字アキラは、街のパトロールをしていた。一見平和そうに見える街も、ちよつと目を凝らせば事件で満ち溢れている。

店先での主婦の喧嘩。道端の捨て猫。野良犬に追いかける人。道に迷った老人。

それらを解決する事も、宇宙刑事の役目。そう信じて疑わないアキラ。正義マニアもここまでくれば立派である。

そんな訳で、アキラは商店街のパトロールをしているのだが。

「……む、何だ？」

目の前の店先、なにやら人だかりができています。何かの事件だろうか。もしそうであれば、行って解決しなければなるまい。

アキラは人だかりに走り寄る。

「……特に変わった点は見られないが……これは何だ？」

ワゴン一杯に並ぶ商品。そこに若い女性が集まって、吟味している。

「なあ、これは何なんだ？」

手近なひとりに問いかける。その女性は、何で彼がこんなところにいるのかと、不審な者を見る視線を向けながらも、口を開いた。

「もうすぐあの日でしょ、だから、みんな買い物してるの」

あの日？ 何か行事でもあるのだろうか。ワゴンの商品をじっと眺めるアキラ。綺麗にラッピングされた品々。やがて、それに一定の規則性を見つける。

「ふむ、これは俺の好物ではないか」

そうと分かれば、話は早い。その行事とやらは、みんなで一斉にこれを食らう日なのだろう。

それならば自分も買っておかなければならない。きっと真由美や弥生もすでに買っていて、その日が来れば食べるに違いない。自分だけ除け者にされても困る。

アキラはふたつ、それを買って込む。変わったものを見るような、店員の眼差し。

ひとつはフュリスにあげるため。彼女もこの事はまだ知らないはずだ。渡してやれば、喜ぶだろう。

アキラは包みを抱え、再び街の雑踏へと踏み込んだ。

今日は13日。明日はいよいよ、イベントの日である。弥生もア

キラも出かけてしまい、早乙女家にはただふたりだけしかいない。そのふたり、真由美とフユリスは、台所でなにやら行っていた。

台所一杯に広げられた道具、材料。これから何が始まるのか。

「さあ、愛情込めて作るわよ？」

「……はあ」

真由美は妙に元気一杯である。何がそんなに楽しいのだろうか。フユリスにはさっぱり分らない。

そんなフユリスを別にして、鼻歌交じりに支度を始める真由美。

「まずはこれを、湯煎で溶かすの」

「ユセン……？」

自慢ではないが、フユリスはさっぱり料理のことが分からない。今まで特に料理をする必要も無かったし、別に自分に必要な技量だとも思っていないかった。せいぜいレトルトものを温める事ができるくらいである。

「ダメよフユリスちゃん、料理は愛情。真心と笑顔をこめて作らないと、美味しくならないのよ？」

では、プロの料理人はいつも笑顔で調理しているのだろうか。頑固オヤジの店というのも世の中にはある。頑固オヤジが笑顔では、ただの気味悪い店に変貌してしまうのではなからうか。

「湯煎っていうのはね、材料を直接火にはかけないで……」

真由美はそんな少女に、ゆっくり丁寧に料理の仕方を教えていく。料理というものは、作り手の心が籠っているものだ。だから、それを食べた者が暖かさを感じたり、優しさを受け取ったりできる。

この少女が作ったものならば、きっと溢れんばかりの愛情が詰まっている事だろう。

「アキラさんも、幸せ者ね……」

小さな体で、一生懸命台所に立つ少女を眺めながら、真由美はほろりと息をついた。

「どうしよう……ママ、本当に作り始めてるし……」

台所をこっそり覗き込む弥生。彼女には、真由美が少女のために

料理を教えているとは分からない。

完全に、アキラのために真由美が作っていると勘違いしていた。となれば、今すぐ乱入して止めた方がいいだろつか。しかし、それでは根本的解決にはならないだろう……。

台所では、真由美が鼻歌を歌いながら、小麦粉をふるっている。何か母親を諦めさせる方法……。

そつと台所の前から立ち去り、電話を手にする。

「……あ、もしもし、瑞穂？　ちよつとお願いがあるんだけど……」

日付が変わり、ついに14日になった。今日も変わらず、アキラは街に出ていく。事件には日には関係ない。常に備えよ、悪人倒せ。正義の味方に、休日は無し。

というわけで、アキラは繁華街へとやってきた。相変わらずきらびやかな装飾を施された場所には、女性達が集まっている。

「大きなイベントなのだな……」

売り場に背を向け、歩き出す。その時、背後からキャーッという悲鳴が聞こえる。

振り返ると、怪人が売り場の女性達を襲撃していた。

「うおおーっ！　貴様らの愛を、俺に寄越せーっ！」

「きゃーっ！」

白い服に、赤いリボンを体中に巻いた怪人。実に猟奇的である。

大暴れで女性達を追い掛け回す、そこへアキラは立ちふさがる。

「待て、怪人！　貴様の相手は、この俺だ！」

「……ブレイバーか、面白い。この鬱憤をぶつけさせてもらおう！」

怪人の身にまとったリボンが、しゅるしゅると解き放されていく。

「くらえ、超拘束ラッピング！」

リボンは音を立てて飛来すると、たちまちアキラの体に絡みつき、その動きを封じる。

「ふははっ。どうだ、動けまい！」

ギシギシ……！

徐々に食い込むリボン。苦痛の表情を浮かべるアキラ。

「ブレイバーはこのバレーン大尉が討ち取るのだ」

「くそっ！」

説明しよう。怪人バレーン大尉のリボンは、鋼鉄以上の強靭さを持つのだ！

—文字アキラ、絶体絶命のピンチ……！

その時、周囲を囲んでいた女性達が、ポカポカとバッグやら拳やらで怪人を殴り始めた。

「あっ、こら、やめろ！」

「うるさい、女の敵！」

「変態！」

ポカポカポカ……！

流石の怪人も、数の暴力にはかなわない。ましてや相手はパワー溢れる、若い女性である。思わず拘束していたリボンを緩めてしまふ。

「よし、助かった。今のうちに瞬着だ！」

キュイン！ 光が一筋、アキラに降り注ぐ。そして光が晴れると、

アキラはヘルメットを装着していた。

「瞬着装甲、宇宙刑事ブレイバー！ 参上！」

ビシッとポーズを決める。女性達の歓声が、辺りを包む。意外な事に、ブレイバーはこの街では人気者なのだ。なんといつても、日頃の細かな活動が、住民に愛されているのである。困っている女性を助けた事も、一度や二度ではない。

それに自覚はないが、アキラはなかなか男前なのである。少々暑苦しいが。

「さあ怪人、改めて勝負だ！」

「……ちよっと待て、その前に、ひとつ貴様に聞きたいことがある」「何だ？」

怪人は辺りを見回すと、言葉が続ける。

「貴様、意外と人気者のようだが……チョコレートは貰うのか？」

「何だと？」

「だから、チョコレートだ。バレンタインのチョコを、貴様は貰うのか？」

「あ、私あげよっかな」

「そうね、いつもブレイバー、頑張ってるし……」

「この前うちのおばあちゃんが助けてもらったって。お礼にあげてもいいかな」

がやがやと外野の女性陣が騒ぎ出す。それを聞いて、プルプルとバレーン大尉の肩が震えだす。

「おのれ……おのれブレイバー……貴様もか……!!」

「何だ、怪人。お前はチョコレートが欲しくて、暴れていたのか？」

「悪いかっ！ お前みたいに幸せな奴に、俺の気持ちなんか……!!」

がつくり膝を突き、すすり泣きを始める怪人。なんといいのか、非情に哀れだ。

そんな怪人に、ブレイバーはゆっくりと近づく。

「……ブレイバー？」

無言でポケットを探ると、ひとつのラッピングされたものを取り出す。

それは、この前アキラが買ったチョコレート。

「ほら、これをやるから元気を出せ」

「……お、男から貰っても、嬉しくねーっ!!」

怪人は勢いよく立ち上がると、通りを走り去っていく。

「同情するなら、チョコをくれーっ!!」

やがてその姿は、夕日の沈む地平線の彼方へと消えていった。

「なんだっただ、あの怪人は？」

勝利を喜ぶ女性達に囲まれながら、ブレイバーは立ち尽くすのだ。  
った。



家に帰ってきたアキラを出迎えた弥生は、その姿にぎよっとした。「……なに、その荷物？」

アキラは両手に大きな袋を抱えていた。

「うむ、なんだか知らんが、山ほどチョココレートを貰ってしまった……ひとついるか？」

断ると、アキラはチョココレートの山を抱えて自室に戻る。そんな様子を、廊下の影から見守る影ひとつ。

「……むかつ」

やがて一同揃った夕食も終わり、居間でそれぞれがくつろぐ。真由美はなんだかニコニコして、アキラとフユリスを眺めている。そのフユリスは、先ほどからなんだか落ち着かないようだ。

やがて真由美は台所へ行くと、何かを手にして戻って来る。それを目にする、弥生も慌てて自室に戻り、ふたつの包みを持ってくる。

「はいこれ、アキラさんに……」

「ちよつと待って、こつちが先よ！」

アキラの前に並ぶふたり。

「ほらアキラ、瑞穂と私から。これあげるから、ママのは受け取らなくてもいいわよ？」

「あらあら、私のチョココレート、受け取ってもらえないのかしら？」

困ったような顔の真由美。しかし、本命のチョコなど、アキラに渡させるわけにはいかないのだ。

アキラは困ったように頭を掻く。これで今日貰ったチョコは何個目だろうか。

「今日は本当にチョコをよく貰う日だな」

ピクツ！ フユリスの眉が動く。

「いいから、ママの本命チョコなんて受け取らないでよ。そのかわり、私と瑞穂からのチョコあげるから。……勿論、義理だけど」

「あら、私のも義理よ？ いつも頑張ってるアキラさんに、感謝を込めて、ね？」

……………  
……………という事は、つまり……………。

「私の、勘違い……………？」

「私はあの人を愛していますもの。航空便で本命チヨコはもう送っているわ」

ヘナヘナと崩れ落ちる弥生。せつかく友人を説き伏せた苦勞は、なんだったのか。こんな事と分かっていれば、無駄な事はしなかったのに。

「とにかく、くれるなら貰っておこう」

チヨコを受け取るアキラ。その姿を、ぶるぶると震えながら見守るフユリス。

「……………ん？ どうした、フユリス？」

「アキラの……………」

その手に、いつの間にか握られるハリセン。そして、音速を超える猛烈なスイング。

「アキラの、バカーーっ！」

とある屋敷。広間に集結した怪人たちに、配られるチヨコレート。これも土気を保つための、大事なイベントなのだ。

少女は眼鏡を光らせながら思う。何処かへ走り去ったまま戻ってこないバレーン大尉も、早まらなければチヨコをもらえたというのに。

怪人のボスというのも、意外と大変な仕事なのだった。

屋根の上、星降る夜空。少女はひとり、膝を抱えてうずくまっていた。

さっきは、何であんな事をしてしまったのだろう。思わず何かに衝き動かされて、彼のことを叩いてしまった。

何で、自分はこうなのだろう。可愛げの無い自分の事が、これほど恨めしく思ったことはない。本当ならば、あの時に自分の作ったものを渡すはずだった。それは今、この手に握られたままだ。

夜風が拭き、髪をさらさらと揺らす。

「バカなのは、私だ……」

彼が他の人からプレゼントを受け取っても、関係ないではないか。彼は彼なのだ。自分だけの物ではない。ましてや、家族同然に付き合っている人からのプレゼント。拒む理由も無い。

だけど、他の人からもたくさん受け取っている。その事実、心がざわめく。

この感情は、何だろう……。

「アキラ……」

膝頭に顔を埋め、そっと呟く。その呟きに、答える者は無く……。

「よいしょと……」

誰かが、屋根の上へ上がってくる。その大柄な体。

「こんなところにいたのか、フユリス」

「アキラ……？」

さっきの件の、文句を言いに来たのだろうか。ぎゅっと瞳を閉じる。なじられても、嫌われても仕方が無い。自分が、全て悪いのだから。自分の感情すら制御できない、自分が悪いのだから。

アキラはゆっくりフユリスに近づくと、その隣に座る。しばし流れる、無言の時。

「真由美さんに、怒られたよ。早く追いかけてやれって」

「……」

「お前に、渡すものがあつたんだ。手を出してくれ」

黙って、彼の言う通りにする。その手に渡される、小さな包み。

「何です、これ？」

「今日はチョコレートを食べる日らしいからな。買っておいただ、お前の分」

真由美から聞いた話を思い出す。今日は、愛する人にチョコレートを送る日。つまり、彼が自分にチョコレートを渡すという事は……。

「勘違いしても、いいんですか……？」

「よく分からないが、受け取ってくれ」

震える手で、そつとその包みを抱きしめる。これは、アキラの気持ちなのだ。そして思い出す。自分が持っている物の事を。

「アキラ、私からも渡すものがあります」

そつとラップピングされたそれを差し出す。何度も失敗し、ようやく作り上げたもの。真由美に教えてもらって、彼のためだけに作ったもの。

「受け取って、もらえますか？」

「ああ、頂くよ」

アキラは快くそれを受け取ってくれた。フユリスの胸に、理解しがたい感情が湧き上がる。渡す事が、できた。その感動と共に。

「食べて、くれますか？ 今、ここで」

アキラは包みを解く。中から出てくる、チョコレートケーキ。とてもシンプルで、その分とても真っ直ぐな想い。

アキラはケーキを口にする。少しチョコがじゃりじゃりして、苦いけれど、そこに籠められた作り手の必死な思いは伝わってくる。

「あの、どうですか？」

「結構味いな。こういうビターなのは好みだ」

ほっと息を吐き出す。自分の想いを、手渡す事ができた。それだけじゃない。彼からの想いも、受け取った。

星空の下、チョコレートケーキを食べるアキラ。それをどこか優しい瞳で眺めるフユリス。お互い微妙な勘違いはあるが、それでもこういうことも許されるのだろう。

今日はバレンタイン、恋人達の日なのだから……。

第七話：あの人に、この想い届け（後書き）

あまあまべたべた。

それが基本です！。

では、よしなに。

## 第八話：大爆走！ 町内マラソンレース！

とある昼下がり。一文字アキラは、一軒の牛丼屋に入っていた。早くて安くて、美味い。まさに、彼のような大食いのためにある店である。

「特盛りつゆだく！ 二人前！」

即座に出てくる、牛丼ふたつ。アキラは手を合わせると、一心不乱にかきこみはじめる。

「いらつしゃいませー！」

その時、ひとりの女性が店に入ってくる。

「牛丼特盛り、六つ頂戴」

アキラは耳を疑う。こんな女性が、六杯も牛丼を食べられるのか。しかも持ち帰りでもなく、特盛りで。

呆然と眺めるアキラを余所に、その女性は運ばれた牛丼を猛烈な勢いで平らげていく。

「がつがつむしゃむしゃぱくぱくもぐもぐ……」

すさまじい勢いだ。食の太い女性というものは、ある意味魅力的ではあるが、これはちよつと流石にひいてしまう。

やがて女性は牛丼を食べつくすと、席を立つ。積み重なる丼を残して。

「ちよつとお客さん、お勘定……」

「勘定なら、そのの彼につけておいて」

アキラを示し、一気に店の外へ飛び出す。

「な、ちよつと待て！」

慌ててアキラは追いかけるが、女性の逃げ足は異様に速く、あつ

という間に見えなくなってしまうた。

目の前で食い逃げをされるとは、宇宙刑事失格である。仕方なく店に戻ると、店員の鋭い目。

「あの人の分も、払ってくださいね？」

正義というものは、時に金で解決しなければならぬこともあるのだった。

ふたり分の代金を支払い、店を出る。志は重いが、財布は軽い。今度、フユリスに小遣いの値上げでも交渉しようか。アキラの財布は、あの少女に握られているのである。

それにしてもあの女、信じられない逃げ足だった。鍛え上げられているアキラよりも、数段早いとは。

多少、正義の味方のプライドが傷つく。今まで何度か、食い逃げを捕らえた事はあったが、ここまで鮮やかに逃げられたのは初めてである。

いやな事を頭から振り払い、歩き出す。すると、目の前の定職屋から飛び出す影。

「待てーっ！ 金払ってけー！」

それは、先ほどの女性。再び走り出し、あっという間に見えなくなる。

「……食い逃げの、プロか？」

アキラは黙って頭を抱えるのだった。

街では、大きな騒ぎが持ち上がっていた。度重なる食い逃げの被害。たつたひとりのために、街中の飲食物店が大きな被害を受けていたのだ。

もはや、この街で被害を受けていない店など無い。事態を重く見た店長達は、似顔絵を書き街中の店に配った。大規模な指名手配である。



だが、それも大した効果は無く、変装した女性の強襲により、商店街の店舗は壊滅的な被害を受けてしまった。まるでイナゴの大群である。通り過ぎた後には、一切の食物がなくなるのだ。

そんなこんなで、ここ早乙女家。アキラの前に集う飲食店の店長達。みな一様に、疲れきった顔をしている。

「それで、今日はどうなさったのですか？」

アキラの問いに、ひとりの店長が答える。

「宇宙刑事のあなたに、お願いがあつてまいりました。なんとかして、あの憎き食い逃げ女を捕まえていただきたいのです」

なるほど、ついに困りきつてアキラという宇宙刑事に助けを求めてきたのだ。

「しかし、相手はどこに現れるのか分からない。しかも、あの逃げ足の速さ。並の人間では追いつけないでしょう。かく言う私も、一度逃げられています」

アキラの言葉に、うーむと頭を抱える一同。そこへ真由美が、お茶を持ってやってきた。

「何とかしてあげられないかしら、アキラさん？」

「しかし、足取りさえ掴めないのでは……」

うーんと小首をかしげる真由美。その姿はちょっとコケティッシュだ。

「そうねえ…… 罨を張るって言うのは、どうかしら？」

「罨…… ですか？ しかし、それは一体どういう？」

「それはね……」

丘の上の大きな屋敷。その地下室で、眼鏡の少女は困り果てていた。配下の怪人、クイーン・ニーゲが屋敷から逃亡したのだ。

しかもその理由が、『空腹だから』という理由では、情けなくなるというものである。

そもそも、怪人たちには十分な福利厚生を提供している。腹が減るのはあの怪人独自の生態のためだ。

食生活の変化に伴い、排出される残飯の量は日々増加している。そのような無駄を処理するために、生み出された怪人。唯一の誤算は、その怪人が非情に美食家だった事だ。

そのために、普通の食べ物で無いと受け付けず、食費は右肩上がり。結局外へ食料を求めて飛び出してしまふ事となった。

できれば、被害が広がる前にさっさと宇宙刑事に退治されて欲しいものだが。

少女は小さくため息をついた。

ポンポン、ポーン！

花火が青空に撃ちあがる。ここは商店街。今日は商店街主催のイベントが、急遽開催されたのだ。

道路に並ぶ屋台、はしゃぐ人々。まさにちょっとしたお祭り騒ぎだ。あちこちから、様々な食べ物の匂いが漂ってくる。そう、このイベントこそ、飲食店協会の主催で開かれた、壮大な饗なのだった。この食べ物の匂いにつられて、あの女は必ず姿を現す。そこを捕まえようというのだ。勿論、それだけではなく、せっかくのイベントをみんなに楽しんでもらいたいという考えもある。やはり何事も、転んでもただでは起きない精神が必要なのだろう。

イベントも盛り上がり、やがてメインの行事の時が訪れる。

『みなさん！ 本日のメインイベント、町内マラソン大会を始めます！』

司会者が、マイク片手に絶叫する。

本部の前に立てられた大きな看板。そこに書かれた優勝商品。それが、あの食い逃げ犯を捕まえる大きな餌。

『一位 焼肉屋牛太郎 食べ放題チケット』

これを見れば、食い逃げ犯の女も黙ってはいられないだろう。マラソン大会で町内を走らせて、へとへとになった所を捕まえる。真由美の立てた作戦だ。この作戦は、満場一致で可決され、こうして実行される事になったわけだが。

「いちにーさんしつと……」

スタート地点で、エントリーを済ませ柔軟体操をするアキラ。あの女にも、限界まで走ってバテてもらわなくてはならない。そのために、本気で走らなくてはならないように、強力な当て馬が必要なのだ。

そんな訳で、アキラに白羽の矢が立ったのである。

他の一般参加者達も、そろそろと集まってくる。なかなか盛況だ。それだけ、この街には暇人が多いのだろう。

やがて出場者の受付も締め切り、スタートの準備が始められる。

アキラは周りを見回す。あの女も、この中のどこかにいるはずだと。「それでは、出場者の皆さんはスタート位置についてください」ポランテアで駆り出された弥生が、火薬銃を片手に位置につく。「おんゆあまーく……げつとせつと……」

アキラは前傾し、瞬発力を溜める。周りの人々も、それぞれ独自のスタート体勢をとっている。そしてゆっくりと銃を持った弥生の手が上がリ……。

パーンッ！

その音を合図に、一斉に飛び出す。アキラは先頭集団に紛れ、走り出す。その中を、ひとりの女が飛び出していく。間違いない、あの食い逃げ女だ。

ひとり独走する女。その後にアキラは続く。今日の彼は絶好調だ。先頭を走る女に、遅れないように着いていく。しかしこのスピードは、マラソンというにはあまりにも速すぎる。

商店街を抜け、最初の角を曲がり、大きな通りへ出る。沿道に大勢の応援の姿。子供達も旗を振って懸命に応援している。

アキラも手を振って、それに答える。もうすっかりアキラも、こ

の街の有名人だ。小さなことから、大きなことまで、様々な事件を解決してきたのだから。

「がんばってー！　うちゅうけいじのおにいさん！」

アキラはその声に背中を押されるように、更にペースを上げた。

商店街の本部前、そこに設置された大型スクリーン。その画面には、衛星軌道上の宇宙巡洋艦ハイペリオンからフュリスが撮影している映像が、リアルタイムで流されていた。

先頭は相変わらず、謎の食い逃げ女（エントリーシートには、クイン・ニーゲと記されていたが）の独走、そしてその後には僅かに遅れてアキラ。後は集団で離れたところを追尾している。

「アキラさん、頑張っているわね」

「当然よ。こうなったら食い逃げを捕まえるだけじゃなくて、優勝商品も手に入れてもらわなきゃ」

真由美と弥生はスクリーンを眺めながら、レースの様子を見守る。

「弥生も走ればよかったのに。いいダイエットになるわよ？」

「冗談じゃないわ。こんな面倒な事、私はお断りよ」

スクリーンの中では、アキラ達が通りを抜けてごちゃごちゃした裏通りへと入っていく。この先は曲がり角の多いテクニカルコース果たして、アキラは一位になれるのだろうか。

「……よし、追いつける！」

アキラはスピードを上げ、先頭の背に近づいていく。徐々に詰まる距離。すると、先頭の女はチラッと後ろを振り向き、いきなり着ていた服を脱ぎだした。

「な、何やってるんだ？」

服を脱いだその下、そこには僅かな鎧のようなもので体を被った姿。少々扇情的である。

そして女は再度振り向くと、もの凄い速度で走り出した。たちま

ち引き離されていくアキラ。

「あいつ、怪人だったのか……？　くそ、このままじゃ追いつけない……」

思案するアキラ。そして、最後の手段を思いつく。腕の無線機に向かつて、語りかける。

「フュリス、コンバットスーツの脚部パーツだけを転送してくれ！」

一瞬の後、空から降り注ぐ光。その光を浴びると、アキラの足にスーツの足パーツだけが装着された。

「よし、これで追いついてみせる！」

気合を込めると、さらに走る速度を上げる。

説明しよう。ブレイバーの足パーツは、装着する事により普段の数倍の速度を発揮する事ができるのだ！

土煙を上げ、猛然と追い上げるアキラ。間もなく遠くなっていた怪人の背中が見えてくる。射程圏内。ゴールまでの距離は、もう大して無い。ここで追い抜かなければ、ゴールで捕まえる事はできないだろう。

「ブレイバーダッツシュー！」

最後の直線に入り、ゴールの様子が見えてくる。鈴なりになる観衆達。

アキラはラストスパートをかける。追い越すまで、あと十メートル、五メートル、三メートル……。ゴールのテープが見える。そしてアキラは、飛び上がった。

「フライング断罪キック！」

どゲシッ！　怪人の後頭部に決まる飛び蹴り。丸太のように倒れる怪人。そしてアキラは、そのままゴールテープを切る。

『一位、一文字アキラ選手ーっ！』

ワーツと上がる歓声。

こうして、食い逃げ怪人の逮捕と、マラソン大会の優勝、ふたつの目的を同時にアキラは達成したのだった。

……あれから数日。

みんなで焼肉屋で食べ放題を楽しんだ帰り道。一軒の店の前を通り過ぎると、入り口から飛び出していく怪人クイーン・ニーゲ。手には岡持ちを提げている。

「何やってるんだ、また食い逃げか？」

店の中に顔を出し、店長に尋ねる。

「いや、街中の店で、順番にバイトさせているんだ。食い意地ははっているけど、あの足での出前は、なかなか役に立つよ。」

成る程、怪人にも役に立つ時があるのだ。

アキラは道路に戻り、みんなと家路を急ぐ。いつか、あの怪人に出前を頼もつかと考えながら。

## 第九話：深く静かに潜行せよ

「プール、ですか？」

「はい。プールです」

にこやかに微笑む真由美。アキラの前には、プールのチケット。何でも、真由美が新聞屋から手に入れたらしい。

「でも、この季節にプールですか？」

「温水プールなんです。よろしかったら、みんなを連れて行ってくれませんか？」

温水プール。冬でも問題なく泳ぐ事ができる場所。なるほど、それならば納得がいく。つまり、アキラに引率を頼みたいのだ。女性ばかりでいくよりは、その方が何かと都合がいいのだろう。

「分かりました。それで、行くのは誰なんです？」

「私と弥生、弥生のお友達のお瑞穂さん。それと、フユリスちゃんも連れて行きたいんだけど……アキラさん、説得してくださいます？」

あの少女の事だから、普通に誘っても来ないだろう。そのためには、『餌』が必要だ。アキラが声をかければ、きっと……。

……………。

「プール……？」

「ああ、フユリスも連れて行きたいって、真由美さんがさ」

少女は黙って考え込む。プールなんて、行ったこともない。ましてや自分は泳げない。そんな事で、一緒に行ってもいいものだろうか。

「泳げないなら、俺がコーチしてやってもいいぞ？」

アキラの、コーチ……。プールの中、手取り足取り……。

ボンッ！ たちまちフユリスの顔が赤くなる。

「どうした？ 顔が真っ赤だぞ？」

「何でもありません！ ……仕方がありませんね。アキラがそこま  
で言うのなら、私もプールに行く事にしましょう。そ、その代わり、  
その、水泳のコーチは、しっかりとやってもらいます。……手取り  
足取り、です」

「うむ、任せろ。必ず泳げるようにしてやる」

こうして、明日は一同揃ってプールに行く事になったのだった。

街のデパート。そこに女性達は買い物に来ていた。アキラはひと  
り、家で留守番。今回は、女性のための買い物なのだから。

きっかけは、フユリスが水着を持っていないことが分かった事。

真由美はそれを聞いて、フユリスたちを連れて買い物に来たのだ。

水着売り場。そこは夏ほどの盛況はないものの、色とりどりの水  
着で溢れている。

「それじゃあ、それぞれ気に入った水着を選んできてね？」

その声に、一同散ってゆく。しかし、フユリスはそこに留まり、  
動こうとしない。

「どうしたの、フユリスちゃん？ 気に入った水着を選んでいいの  
よっ。」

少女はうつむいたまま、答える。

「どういふ水着がいいとか、その、分からないので……」

真由美はフユリスの手を引いて、子供用水着売り場に足を運ぶ。  
カラフルな水着の中から、この少女に似合いそうなものを探す。

色白で、華奢な少女。その身を包むのに、相応しい物。それを選  
び出すのは、責任重大である。何といっても、この少女が見せたい  
相手。その人に気に入ってもらわなくてはならないのだから。

やがて真由美は、一着の水着を選び出す。淡い水色のセパレート、  
小さなパレオがついている。僅かな少女の瞬間というものを、浮か



び上がらせるようなデザイン。

早速フユリスに渡し、試着室へ送り出す。しばらく時が流れ……。やがて試着室のカーテンが開く。

「あらあら、まあ！」

そこには、恥じらいで白い肌を真つ赤に染めた少女。水色の水着は、優しく肌を被い、慎ましやかな胸も、僅かに自己主張をしている。なんとというか、思わずだきしめてしまいそうな容姿だ。

「似合ってるわよ、フユリスちゃん」

「……よく、分かりません」

少女には、自分の魅力が分かっていないのだろう。危うげで、儂い少女の色気。それはこの今しか存在しない、貴重なものだ。

「ふふっ、これならアキラさんもいちころね」

「あ、アキラの事なんか、どうでもいいです。私は泳げれば、その……」

本当に、微笑ましい。真由美はあの鈍感な青年が、この素直でない少女に振り向いてくれる事を、願わずにはいられなかった。

弥生達も、それぞれの水着を選び終わったようだ。

『最近、胸がきついよねー』といていた弥生も、満足のいくものを選んだのだろう。

「瑞穂も、もうちょっと冒険すればよかったのに」

「私は、大人し目ので良いんです。弥生ちゃんほど、スタイルもよくありませんし……」

自分と弥生の胸を見比べ、ため息をひとつつく瑞穂。早乙女家の遺伝の力は、素晴らしい。真由美さんだって、もうもの凄いスタイルをしているし、弥生だってモデル体型だ。比べるなどという方が無理であろう。

会計を済ませ、デパートを後にする。いよいよ明日は、お披露目

の日だ。果たして、誰がプールサイドのヒロインになれるのか。そんな事は誰も考えず、ただ楽しむ事だけを思い描くのだった。

そして、今日はプールに行く日。みんなの荷物を背負ったアキラが、女性達の後続く。唯一の男としては、今日の責任は重大だ。みんなのガード、世話、やる事は山積みである。

しかし、こういう時に燃えるのが、正義というものである。そういうわけで、アキラは嫌な顔ひとつ見せずに、後を着いていくのだ。

やがて一行は、街中の屋内プールに辿り着く。併設された屋外プールは、夏までお休み。しかし屋内の温水プールは、いつでも営業している。スポーツを楽しむ人などで、年中賑わっているのだ。

入り口をくぐり、更衣室に入る。瑞穂はチラッと、着替える弥生たちを見る。

「……」

神は、何と不公平なのか。真由美はばいんばいんだし、弥生もすらつとしていて、出るところは出ている。フユリスも、歳相応の可愛らしさをもし出し、将来性を感じさせる。それにひきかえ、自分はどうだ。

「……理不尽」

ぼつりと呟く。

「何か言った、瑞穂？」

すでに水着に着替え終わった弥生が問いかける。慌てて首を振り、自分も着替え始める。

不公平がなんだというのだ。いずれ人々はあまねく平等になされるのだ。この自分の手によって。そのために、自分は……。

「ほら、行くよー!」

着替え終わって、なにやら考え込んでいる瑞穂を、弥生が引つ張

る。

「あ、ちょっと待って弥生ちゃん！」

そうして、騒がしく彼女たちはプールサイドへ赴いた。

プールサイド、そこに連なる男達は、入ってきた女性達に目を奪われていた。

先頭はメリハリの利いたボディーを、黒のビキニで包んだ妙齡の女性。長い髪をアップにまとめ、ちらりと見えるうなじがセクシーだ。

次にやってきたのは、小さな少女。淡い水色のセパレートの水着、ひらりと翻るパレオ。

成長途中の瑞々しい肢体。まさに、その手の人にはたまらない。

続いてふたりの女の子。ワンピーススタイルの水着が、発達した体を包んでいる。ひとりは活発そうな娘。ボディーの方も、実に活発的に自己主張している。

もうひとりのおとなしそうな子も、それには劣るとはいえ負けるものではない。

プールサイドに、一際花が咲いたようだ。プールの中では、見とれていた彼氏を彼女がつねるといった光景が、あちらこちらで見られる。当然、男達は我先にと声をかけようとしたのだが。

「おーい、こっちだ！」

ひとりの男が、女性達を呼び寄せる。大柄、筋肉質。一目で鍛え上げていると分かる姿。

「どうしたんだ、遅かったじゃないか」

「女の子は色々と時間がかかるんですよ」

真由美が微笑んで答える。

「そういうものか……」

そうは言うものの、あまり分かってはいないようなアキラ。

「ふふっ、アキラさん、ちょっと……」

そう言つと、真由美はひとりの少女を前に押し出す。おろおろと慌てふためくその少女。

「どうですか？ 見違えるでしょ？」

水着に身を包んだフユリス。ちらちらと、赤い顔でアキラを見る。「ふむ……なるほど」

じっくりと少女を眺める。そのおかげか、ますます肌を赤く染める。

「ほら、何か感想を言ってあげないと……」

「ああ、よく似合ってる。フユリスも意外とやるものだな」

「ちよつとアキラ、こっちは無視なわけ？」

「いや、弥生ちゃんたちもよく似合ってる。特に弥生ちゃん、その胸が……」

傍らで言い合いを始める三人。そんな三人を眺めながら、真由美はフユリスの肩に手を置く。

「良かったわね、褒めてもらえて」

「……」

こくと頷く少女。それだけでも、ここに連れてきた甲斐があったというものだ。フユリスの手を引いて、先に歩き始めた三人を追う。

『ここに来て……良かったかも』

歩きながら、フユリスは思う。

後は泳ぎのコーチをしてもらいながら、少しずつアキラとの関係を深めていこう。こんな時くらいしか、自分は素直になれないのだから。

やがて一同は、泳ぎの前の柔軟体操を始めた。言い寄ろうとする男達は、アキラの存在が完全にシャットしている。

やがて体操が終わると、アキラはフユリスをプールの中から招く。  
「ほら、怖くないぞ。早く入って来い」

恐る恐る、プールの中に入る。しかし、僅かに足が届かない。思  
わずばたつき、沈みそうになる。しかし、アキラはそんな少女を、  
そつと抱き上げ助け出した。

「フユリスにはちよつと深いか……。しばらく俺に掴まって、水に  
慣れるんだ」

僅かに震えるフユリスに、彼らしくも無く優しく語り掛ける。フ  
ユリスは顔をあげる。優しい瞳と目が合った。

『……アキラって、こんな顔もできるんだ……』

いつも馬鹿のように笑っている彼。でも、今はこんなに優しい。  
ぎゅつと彼にしがみつく。素肌から伝わる体温。こんなにも……温  
かい。

「ちよつと、弥生ちゃんつてば！」

「ジャイアントストライドエントリー！」

その時、弥生が勢いよくプールに飛び込む。その波しぶきを浴び、  
フユリスの体が濡れる。

「きゃっ！」

「おつと……」

気がつけば、全身でアキラにしがみついている状態。慌てて体を  
離す。

「しかし何だな、フユリスも意外と可愛いところがあるな」

「なつ、いきなりなにを言い出すんですか！」

大慌てでアキラから離れるフユリス。しかし、足がつく事は無く、  
そのまま沈みかける。

「無茶するんじゃない。ほら、泳ぎ方のコーチしてやるから」

「ぶはっ……はい、お願いします……」

そんな様子を、プールサイドに座って眺める真由美。

「若いつて、いいわよねえ……」

プールの縁に捕まり、バタ足の練習をするフユリス。側にはアキラが付き添っている。

意外にもアキラの教え方は、スパルタではなかった。外見は肉体派バカなのだが、それなりに他人を思いやる気持ちはあるらしい。

「そう、息継ぎは泳ぎの基本だ。体全体の力を抜いて……」

「甘い、甘いぞブレイバー！」

突如として、あたりに響く声。アキラが振り向くと、飛び込み台の上に、ひとつの姿。

「何だ、お前は？」

「ふはははっ、俺の名は……」

しかし、そんな会話をしているアキラの腕を、フユリスが引っ張る。

「まだコーチの途中です。よそ見しないでください」

「ああ、すまん……」

無視して練習を続ける。ふるふると震える影。

「貴様らあ！ 俺を無視するなあ！」

「うるさいです。どっか行っちゃってください」

一言のもとに、退けられる。

ぷつーん！ と、堪忍袋の緒が切れる音がした。

「俺は、俺様は、怪人バターフライ！ ブレイバー、貴様に勝負を申し込む！」

水泳パンツにゴーグル装備の、半魚人のような姿の男が叫ぶ。

「勝負だと？」

「そう、貴様が勝てばよし、しかし、もし貴様が敗北したならば、このプールは俺の物。俺に従うものだけが入れるようにしてやる！」

「あの馬鹿、勝手に何を……」

弥生の隣で、瑞穂が小さく呟く。

「さあ、どうするブレイバー？ 尻尾を巻いて逃げるのか？」

怪人の挑発に、アキラは拳を固める。

「いいだろう。その勝負、受けよう！　それで、勝負の方法は何だ？」

「決まっているだろう。水泳勝負だ！」

プールサイドは、見物人で鈴なりになっていた。

これから、プールの存亡を賭けた勝負が始まるのだ。……しかし、怪人の目的がさっぱり分からない。こんなプールを占領して、一体何を企んでいるのか。プールを手に入れることで、何か猟奇的なことでも起こすのだろうか。

ともかくにも、そんな事は許すわけにはいかない。そんな訳で、こうして勝負する事になったのだった。

「第一のコース、一文字アキラ！」

飛び込み台の上で、アキラはガッツポーズを取る。幸い、泳ぎには自信がある。負ける事など、考えてもいない。相手が誰だろうと、全力を尽くすのみだ。

「第二のコース、怪人バターフライ！」

ムキツとポーピング。その体は、まさに泳ぐために特化されたものだ。手ごわい相手になるだろう。

ふたりは共にスタート体勢をとる。引き絞られた弓のように、いつでも飛び出せるように。

「よーい……」

スタートの号令がかかろうとする。最初の一飛びが勝負だ。どんなレースでも、スタートが肝心なのだから。

「……スタート！」

アキラは大きく飛び込む。一瞬遅れ、怪人がほぼ真上にジャンプする。

「これぞ秘儀！　超シンクロナイズドダイープ！」

バシャーーンッ！　すさまじい波が巻き起こり、周囲の見物客

を洗い流す。

「キャアーツ！」

スタート地点横で、様子を眺めていたフュリスは、その波に巻き込まれ、プールの中へとさらわれていった。

「フュリス、おい、しっかりしろフュリス！」

アキラが懸命に呼びかける。その背後には、プールの底に突き刺さり、足だけを宙にさらす怪人の姿。非常に犬神家である。

フュリスがプールに落ちた事を知ったアキラが、すぐに彼女を助け出したのだが、すっかり水を飲んでしまったフュリスは、目を覚まさない。

完全に溺れてしまっていたのだ。レースは中断、すぐにアキラは手当てを開始した。

「水は吐かせた……しかし、目を覚まさないという事は……」

事態は想ったよりも深刻らしい。周囲を真由美たちが、心配そうに取り巻いている。

「こうなったら仕方がない。人工呼吸で、何とかするしか……」

ぴくつ。僅かにフュリスの肩が動く。しかし、それに気がついたのは、ひとりしかいなかった。

「あらあら、フュリスちゃんったら……」

真由美は微笑む。この少女は、とつくに気がついているのだ。ただ、この後に起こる事を、待ち望んでいるだけで。

アキラは大きく深呼吸をすると、フュリスへと顔を近づけていく。徐々に、赤みを差していく少女の頬。今、ここでとやかく言う必要も無いだろう。それを少女は望んでいるのだから。真由美は微笑まじさを持って見守る。

そして、ふたりの唇は重なるうと……。

「バックロールエントリーキーーク！」



どっつ！

突如として飛来し、アキラの頭にキックを加える怪人。ゴチンという音がして、アキラは思いつきり床にキスをする。

「あれしきの事で、俺を倒したと想うなよ、ブレイバー！」  
ぶすぶすと煙を上げ、床に伸びるアキラ。

「こうなれば直接打撃戦で勝負だ。立て、ブレイバー！……ん？」  
気がつけば、怪人の前にゆらりと仁王立ちする少女。その肩はプルプルと震えている。

「……せっかく……せっかくもう少しで……」

いつの間にか、その手に握られているハリセン。そして少女は、思い切りそれを振りかぶった。

「この、馬鹿っ！」  
バシャーーンッ！

渾身の力を込めたハリセンの一撃。怪人はくるくると舞うと、そのまま窓を突き破って遙か大空へと叩き出されていった。

はあはあと、肩で息をつくフユリス。床に伸び、意識不明のアキラ。

こうして、プールサイドの大激戦は、ひとりの少女の怒りの一撃で終わったのだった。

## 第十話：危機！ ブレイバー瞬着できず！

「もうそろそろ、あのブレイバーを何とかしないとイケませんね……」

少女はひとり呟く。ブレイバーのおかげで、この街を世界征服のモデルケースにする計画は、頓挫している。つい先日も、配下の怪人慰安のために『安全・安心・確実に』プールを手に入れようという計画だったのだが、あえなく失敗してしまった。

そろそろ、本気を出してかからねばならないだろう。そのためには……。

眼鏡の奥の、瞳が光る。

「アレを、使ってみますか……」

本日も、アキラは絶好調。朝食も駆けつけ三杯、白飯をおかわり。正義の味方は、体が資本だ。いつでも戦えるように余念が無い。

「もうちょっと遠慮したらどうなんですか、アキラ」

フユリスの忠告にも耳を貸さない。自分の体の事は、自分が一番分かっているのだから。

「ごちそうさまでしたっ！」

更におかわりをし、ようやく席を立つ。これから町内の見回りをしなければならぬ。どんな小さな事件も見逃さないように。正義の味方は、地域密着型なのである。

「ちよっと待ってよアキラ、今日は私の買い物、荷物持ちをしてくれるはずでしょ？」

出ていこうとするアキラを引き止める弥生。力だけはあるアキラは、たびたびこうしてこき使われている。居候している恩義もあるため、アキラには断ることができない。まあ、それが無くとも彼は人の頼みを断ることなどはしないのだが。

「分かった。早く準備をしてくれ」

一足先に玄関へ向かう。弥生も朝食を片付けると、着替えて後を追う。初めの頃に比べて、何となく弥生のアキラに対する態度も柔らかくなっている。自覚はないのだろうが、家族の一員として見られるようになったのだろう。

「フユリスちゃんも、一緒に行かないの？」

ひとり朝食を続けている少女に、真由美は声をかける。

「私は仕事がありますから。いちいちアキラに構っていただけません」

「でも、帰りに一緒にお食事とかしてこれるのよ？」

「ぴくつとフユリスは反応する。しかし。」

「そ、そんな事、私には関係ありません」

素直になれない少女。まあ、これもひとつの彼女のスタイルなのだろう。とやかく口を出す事でもない。真由美は黙って、朝食の後片付けを始めるのだった。

駅前の繁華街。そのデパートに、アキラと弥生は訪れていた。

「もうそろそろ、春物の服を買っておきたいのよ」

女性のファッションに対する考え方。男であるアキラには、いまいち分からないものがある。彼はいつも革ジャンに穿き古したジーンズ。対する弥生はいくつ服を持っているのかも分からない。

「ついこの間も、弥生は新しい服を買っていたような気もするのだが。」

「そんなに服を揃えて、どうするんだ？」

「前の服は、もうきつくなっちゃったのよ。私、成長期だから」

アキラはじつくりと隣の弥生を眺める。

「……何よ？」

「なるほど、太ったんだな？」

パチンと弥生は無遠慮なアキラの頬を打つ。

「違うわよ！ 胸とかがきつくなつたの！」

弥生にも、譲れないプライドがあるのだ。太ったなどと言われるのは心外である。

そうこうしているうちにも、一軒の女性服売り場に辿り着く。

「私は服を選んでくるから、ここで待っていていなさい」

「俺が服を見て、感想を言わなくてもいいのか？」

「あなたに女の子の服の良し悪しが分かるの？」

お世辞にも彼の選美眼が優れているとは思えない。無骨な彼に、何が分かるというのだろうか。

けれど、確かに彼の言うことにも一理ある。他人の目から判断してもらふ事も、服を見立てる上で大切な事だ。マヌカンだけに任せるとよりは、よほど良いだろう。

「そうね……そこまで言うなら、感想くらいは聞かせてもらおうかしら」

ふたりは並んで店へと入っていく。そんな後ろ姿を、誰かが眺めている事も知らずに。

「ねえねえ、これなんかどう？」

「ちょっと弥生ちゃんには派手過ぎないか？」

店の中、ふたりは色々と服を見立てていた。店員はそんなふたりを離れて眺めている。本人達がどう言おうと、その姿は休日には彼女の服を選んでいる恋人同士に見える。

「それじゃあ、こっちは？」

「うーむ、少し大人っぽくはないか？ 露出が多すぎると思っぞ」

「このくらい当たり前よ。ちょっと試着してみるから、感想聞かせてね」

服を片手に、試着室へ入っていく弥生。その姿を見送りながら、アキラはため息をひとつつく。

成る程、女性の服を見立てるといのは、大変な事だ。世の男性達も、このような苦勞をしているのか。

ぶらぶらと店内を歩く。すると、ふと目にとまる一着の服。

「……ふむ」

どうしてそれが目にとまったのか、よく分からない。しかし、誰かに似合うような気がしたのだ。

値札を見れば、結構いい値段。しかし、何故だかそれを買わなければならぬ、そんな気がした。

「じゃじゃーん、どう、アキラ？ 似合うでしょ？」

試着室から、大人っぽい格好をした弥生が出てくる。しかし、アキラは上の空。

「ちょっと、こっちを見なさいよ！」

ギリギリとアイアンクローを仕掛ける弥生。

「ああ、うむ、結構似合ってるぞ」

「なんだか投げやりね。まあいいわ。これ買って、次の店に行きましょ？」

手を引く少女を引き止め、アキラは一着の服を手取る。

「どうしたの？ その服、私にはちょっと子供っぽいわよ？ それにサイズも……」

「いや、弥生ちゃんにじゃない。これは……」

それから、彼らはいくつもの店を回った。弥生はそのたびに、何着もの服を試着していく。こういう時、女は妥協はしない。自分をより良く見せるため、苦勞は惜しまないのだ。

やがて、日は高く上がり昼になる。アキラ達は最上階の展望レストランに赴く。

「さっきの買い物で、ちょっと財布が軽いんだ。奢る事はできないぞ?」

「分かってるわよ。ちょっと期待してたんだけどね」

やがてふたりの前に運ばれてくる料理。アキラの腹が、ぐうと鳴る。

「まったく、デリカシーが無いわね」

「あいにく今、切らしてる。再入荷は未定だ」

がつがつと食事を始める。そんなアキラを眺めながら、弥生は思う。自分にもし兄がいたならば、こんな感じだろうか。いつもだらしなないけれど、困ったときには、頼りになる兄。

せいぎのみかた。言葉にすれば、それはとても陳腐だけど、世の中にひとりくらい、そういう人間がいてもいいのではないかと思うのだ。誰のためでもない、ただ他人のために、その正義を燃やす人。そんな人が今、目の前にいる。

最初は変な奴だと思った。けれども付き合っているうちに、だんだんと見えてきた。彼の本性が。それは、純粹な正義。一方的な押し付けの正義ではない。本当に、心の底から生まれ出るもの。

だから、もう彼への嫌悪感はない。むしろ、自分は彼の事を好ましくさえ……。

「どうしたんだ、食べないのか?」

「ちょっと考え事をしていただけよ。あなたにこのハンバーグは渡さないんだから!」

気を取り直して、食事を続ける。何を自分は考えていたのだろうかと思う弥生。彼は一文字アキラ。自分の家の居候、それだけなのだ。

昼下がりの道、山のように荷物を抱えた男と、手ぶらの少女。並

んで歩いている。

荷物持ちは男の仕事。それは遠く太古から刻みつけられた遺伝子の仕事だろう。男は結局女には逆らえないのだ。

「ねえアキラ、あなたって何で宇宙刑事になったの？」

それは、何となく思いついたこと。他意があつて尋ねた訳ではない。

「ああ、俺の親父はある辺境惑星に勤務していた宇宙刑事で……彼の家族の話は、初めて耳にした。続きを促す。

「そこで一生を過ごして、殉職した。俺はそんな親父を超えたいと思つて、宇宙刑事になつたんだ」

殉職。たつた一言なのに、それは重く弥生の胸に響いた。

「ごめんなさい、変な事聞いちゃって……」

「どうした？ 特に変な事とは思えなかつたが」

アキラはまつたく気にしていないようだ。

「人には、成すべき事がある。それを全うして死んだなら、それは本望じゃないかと思うんだ……」

そのまま、ふたり黙って歩く。もし、自分の命とひきかえに、この街を守れるとしたら、彼はどうするのだろうか。その質問は、弥生の口から出る事は無かつた。

「情けないな、ブレイバー……」

そんなふたりの前に、ひとりの男が立ちふさがる。しかし、見ていて非常に不快感をおおるのは何故だろう。

その答えは、その男の格好にあつた。筋肉隆々の男らしい肉体。しかし、それを包むのはフリフリのゴスロリドレス。実に似合っていない。

「何、コスプレ？」

「違う！ これは完全な男女同権の賜物。男がスカートを穿いて、何が悪いというのだ！」

言いたい事は分かるのだが、実に見ていて気分が悪い。そういう事は、似合っている者が言う台詞ではなからうか。

「ブレイバー、何故そうも女に従うのだ？ この世界は、男女平等であるべきなのだ。貴様のように、女にへいこらすような奴など、男ではない！」

「それで、何の用なんだ？」

「決まっているだろう。ブレイバー、貴様を修正してやるのだ！」  
「そういうと、男はフンと体に力を込める。たちまち上半身の服がびりびりと破け、むき出しの筋肉が現れる。」

「俺の名は怪人シメール！ ブレイバー、勝負だ！」

「……弥生ちゃん、離れてくれ。いくぞ、瞬着！」

ポーズを決め、コンバットスーツを呼ぶ。しかし。

「甘い！ 瞬着ジャマー！」

ふよんふよんと謎の光線が、空から降り注ぐ光に向かって放たれる。そして光がアキラに到達すると。

ポンッ！

……アキラの頭には、可愛らしい麦藁帽子。

「な、なんだと？」

怪人は誇らしげに笑う。

「これぞ秘密兵器、瞬着ジャマー。ブレイバー、貴様を瞬着させるわけにはいかない！」

諦めずに、アキラは再度瞬着を行う。しかし、それも妨害されて、アキラの頭にのつたのは綺麗な花が一輪。ヒーロー形無しである。

「ふはははっ、瞬着できない貴様など、おそるるに足りんわ！」

「くそっ……！」

ブレイバー、絶体絶命のピンチ……。

そこへ、今まで成り行きを見守っていた弥生が声をかける。

「ねえ、アキラ？」

「なんだ、弥生ちゃん？」

「変身しても別にヘルメットつけるだけなんだから、いつもどおり殴り倒しちゃえばいいんじゃないの？」

……。



じりじりとアキラは、怪人に近づく。

「な、ちよつと待て！ ヒーローならヒーローらしく、変身して戦え！」

「こんな言葉を知っているか、怪人？」

……。

「お洒落なんか気にしない。ありのままの君が好き、と」

そのまま怪人に走りより、必殺のパンチを繰り出す。

「断罪パンチ！」

「げぶらっ！」

拳一閃、吹き飛ばす怪人。そのまま道路をごろごろとのた打ち回る。

「おのれ、おのれブレイバー！ こうなったら俺の必殺技で……」

その怪人の肩をぼんぼんと叩く何者か。

「……何だ？」

振り向くと、そこには警官の姿。

「君、ちよつと署まで来てもらおうか？」

「なんだと？ 俺は今大事な勝負中で……」

「不振な格好をした男が、街中をうろついていると通報があったのだ。とにかく、一緒に来るんだ」

ずるずると引っ張られていく怪人。こうして、街中でのどうしようもない戦いは、どうしようもない結果に終わったのだった。

夕食も終わり、各々自由にくつろぐ。アキラはテレビを眺め、フユリスはその隣でなにやらノートパソコンのようなものをいじっている。先の戦いで、コンバットスーツの転送を妨害された事を受けて、新たに転送プロトコルの変更を行っているのだ。

「……ああ、そうだフユリス、ちよつといいか？」

アキラが思い出したように席を立つ。不思議そうな顔で、その後を見送るフユリス。

やがてアキラは、一つの包みを持ってやってきた。それを少女に手渡す。

「なんですか、これ？」

「いいから開けてみる」

言われるままに、包みを解く。その中から出てきたものは。

「……………これって……………」

空色のワンピース。あの時、アキラが買ったもの。

「これ……………もしかして、私に？」

「ああ。サイズは合うと思うんだが……………念のために試着してこい  
いそいそと少女は部屋に入り、着替えて再び姿を現す。

「あの……………どう、ですか？ こういうの、着慣れていないので……………」

「ふむ、思った通りだな。よく似合ってるぞ」

「かぁと頬を赤く染める少女。」

「なんだ、アキラも意外と見る目があるのね」

「本当、似合ってるわよ。フユリスちゃん？」

「おおむね彼の選択は、好評なようだ。」

「どうした、気に入らないのか、フユリス？」

「どこか、心ここにあらずといった感じの少女。アキラの呼びかけに、慌てて彼のほうを向く。」

「いえ、気に入らないわけじゃないです。ただ、その……………私がこんなもの、頂いてもいいのか……………私、何のお礼もできませんし……………」

「そんな彼女の頭を、ぼんぼんと軽く叩くアキラ。」

「フユリスには、いつも世話になってるしな。俺には、このくらいしか礼ができない。だから、良かったら受け取って欲しい」

「……………はい」

「僅かに、しかし少女にとっては精一杯、フユリスは微笑んだ。」

## 第十一話：勝利の逆光、ピカソ不許可

青空の下、アキラとフユリスは歩いていった。目指す場所は、中央公園。何故、こんな事になったのかというところ……。

『今度ね、町内写真大会があるの』

朝食の後、真由美が唐突に切り出す。

『写真大会、ですか？』

『そうよ。優勝者には、お米1俵がプレゼントされるの。それでお願いなんですけど……』

つまりは、そういう訳である。優勝するために、良い写真を撮らねばならないのだ。

最初は弥生にモデルを頼もうとしたのだが、素気無く断られてしまった。そんな訳で、アキラが一番身近な少女に、モデルを頼む事にしたのだった。

「モデルなんて、何をすればいいんですか？」

「特に気にしないでいい。自然体でいれば、それが一番だ」

アキラとて、カメラマンの心得を知っているわけではない。ただファインダーを覗いて、シャッターを切ることくらいしかできない。それでも、まあ何とかなるだろうと思うアキラ。写真は心という言葉もある。幸いモデルは一流だ。後はどれだけ、この少女の魅力を引き出せるかだ。

公園に着くと、すでに幾人かがシャッターを切っていた。なかなか競争率が高いらしい。早速アキラも真由美から借りたカメラを取り出し、準備をする。

「それじゃあ、始めようか」

「はあ……」

ファインダーを覗く。レンズの向こうには、無表情な少女。

「ほら、もつと愛想良く、笑ってくれ」

「そう言われても……」

愛想良くなんて、彼女には向いていないのだ。いつも無表情、無感動。唯一例外があるとすれば、この……。

「うーむ、できれば笑顔のシーンが欲しいところだな……」

ぶつぶつと文句を言っている、ひとりの男が関わる時だ。

それだって、自覚があつてのことではないのだ。そうそう笑顔になれるわけではない。

ふたりの撮影会は、前途多難なのだった。

ここは早乙女家。居間でお茶を飲みながら、ふたりの女性がくつろいでいた。

「ねえ、ママ？」

「なあに、弥生？」

雑誌を読みながら、弥生が尋ねる。

「どうしてママが写真を撮らないで、アキラに任せちゃったの？」

ママって結婚前は、世界を飛び回るジャーナリストだったんでしょ

？ アキラよりはマシなはずだわ」

そんな彼女に、真由美は微笑みで返す。

「優勝商品なんて口実よ。今日一日、ふたりっきりで楽しんでくれればそれが一番なの」

「……呆れた。わざわざデートのセッティングに大会を利用するなんて」

真由美の真意を知れば、思わずため息も出るというものだ。

「だってふたりとも、素直じゃないんですもの。つついおせつかい焼きたくなっちゃうのよね」

あの微妙な距離を、つかず離れずするふたり。見ているだけで、

微笑ましくなるような。

『……応援、してあげなくちゃね?』

そんな真由美の真意も知らず、公園内をぶらぶら散策するアキラとフユリス。どこか撮影によさそうなロケーションを探しているのだ。

しかし、なかなかこれだと思っような場所はない。行ってみればすでに先客がいたりで、思うようにはいかないものだ。

とりあえずは隣を歩く少女の姿を、思い出したようにフィルムに収める。しかし、どうにも表情が硬く、写真としてはまいちである。カメラを向ければ、どうしても意識してしまうのか、ますます無表情に磨きがかかる。

「カメラを意識するな。もっと自然に……」

「そんなの、無理です」

うむむとアキラは考える。とりあえずは、慣れてもらうしかないのだが、いつになることやら。もっとこの少女の自然体を引き出すためには……。

アキラはカメラを納める。そんな様子を、不思議そうに眺めるフユリス。

「撮らないんですか?」

「いや、これは後でいい。せつかく外に出たんだ。少し楽しもうか」  
そつとフユリスの手をとる。

「きゃっ!」

いきなりの接触到、思わず声が出てしまう。

「どうした、フユリス?」

「な、何でもありません……」

内心のドキドキを押さえながら、何とか平静を取り繕って答えるフユリス。彼に変に思われてはいないだろうか? 冷静に答えを返

せているだろうか？

そう、彼は別に特別な事を考えて、手をとったわけではないのだ。だから自分が慌てることなんてないのである。

『平常心、平常心……』

しかし、思えば思うほど、彼の手の柔らかさ、温もりを感じてしまい、赤面する。唯一の救いは、鈍感な彼がそんな少女の変化に気がつかない事だろう。しかし……。

『まったく気がつかないのも、どうかと思います……』  
鈍感な時として罪なのだ。

手を繋いだまま、公園の中を歩く。やがて目の前に、一軒の露店が見えてきた。

「ちょっと待つてる、フユリス」

アキラは手を離し、駆け出す。今まで感じていた温もりが消え去った事に、僅かな寂しさを覚える少女。

やがてアキラは、両手にソフトクリームを持って戻ってきた。

「ほら、奢りだぞ」

手渡されるソフトクリーム。それを舐めながら、再び歩き出す。青空の下、辺りを見回せば恋人達が何組も仲良く歩き回っている。ふとフユリスは気がつく。今の自分達も、周りからは恋人同士に見えているのだろうか。チラッと横を見れば、アキラと目が合う。気恥ずかしくなり、慌てて目をそらす。

これでは、まるでデートではないか。彼と、デート……。意識しまいとしても、どうしても鼓動が早くなる。

「フユリス……」

「はっ、はいっ！ 何ですか！」

真剣な表情で自分を見つめるアキラ。胸の鼓動を抑えて、その瞳を見つめるフユリス。静かなひと時が流れ、そしてゆっくりとアキラは口を開く。

「アイス、溶けてるぞ？」

「こ、この……馬鹿っ！」

どういうわけだか、フュリスは機嫌を損ねてしまった。

アイスの味が入らなかつたのか、それとも溶けてしまったのがまずかつたのか。ともかく、アキラは何とか機嫌を直そうと四苦八苦する。

「ほら、俺の分も食べていいから」

食べかけのソフトクリームを差し出す。少女はそれをじっと見つめ……。そして、なぜか赤い顔で受け取る。恐る恐る口をつける。何とか機嫌は直ってくれたらしい。

さて、いつまでもこうしてはられない。当初の目的どおり、写真撮らなければ。気がつけば、ふたりは公園の中の池の側に来ていた。

「さて、そろそろ写真を撮るか」

フュリスがアイスを食べ終わったのを見て、アキラはカメラを取り出す。そしてどこか満足げな少女の姿を、フィルムに収めようとして……。

「ぬおっ！ ブレイバー！」

声の方を見ると、怪しげな髪形をした男の姿。

「まさか貴様も、写真大会に参加するのではないだろうな？」

「誰だ、お前は？」

男はカメラを片手に見得を切る。

「俺様は怪人、アーラ・キー！ 怪人たちの胃袋を満たすため、米一俵を求めて撮影中なのだ！」

「余計なこと口走るな！」

パシーンと怪人の頭をはたく、もうひとりの影。鎧のような物に全身を包み、仮面で顔を被ったその姿。

「なんとしても優勝を頂き、名を知らしめるのが一番の目的。米は二の次だ」

「は、ははっー！」

どうやら鎧姿の奴が、怪人の大元締めらしい。アキラはふたりを前に、身構える。

「また何か悪さを企んでいるのならば、容赦はしないぞ？」

しかし、そんな逸るアキラを、鎧姿は制す。

「さて。力技だけでは埒があかない。ここはひとつ、私の怪人と写真で勝負するというのはどうだ？」

確かにここにフュリスがいる以上、コンバットスーツの転送は受けられない。しかも相手はふたり組。フュリスを守りながら戦うには、あまりにも不利だ。

「……いいだろう。では、撮影勝負だ！」

その声と共に、一同は分かれる。より良い被写体を求めて。

アキラはフュリスを連れて、池のほとりに出る。ここならばロケーションは万全。後は撮影されるもの……。

「……？　なんです、アキラ？」

「頼むフュリス、何か可愛らしいポーズでも取ってくれ」

「そんな、急に言われても……困ります」

可愛らしいと言われても、あいにくと彼女はそういうには無縁である。ましてや自身の備える容姿にも、気がついていない。磨けば光るのだが、本人にその意思が無いのである。そんなわけで、どうすれば良いのか分からない。

そうこうしているうちにも、怪人アール・キーはパシャパシャと辺りを撮り回っている。どうやら数で勝負するらしい。対抗してアキラも、カメラをフュリスに向ける。

しかし、レンズを向ければ固まってしまう少女。撮られると意識すればするほど、自然な姿とは遠くなってしまう。

このままでは、勝負に負けてしまう。何かいい方法はないものか……。

ふと、背後の池を見ると、何かがばしゃばしゃと水面を騒がせている。



「何だ、水鳥か……？」

しかし、よく見てみるとそれは小さな子猫だった。ばしゃばしゃと必死でもがき、何とか岸に泳ぎ着こうとしている。

「おおっ、格好のシャッターチャンス！」

怪人は溺れる猫にカメラを向け、写真を撮りまくる。

「写真に必要なものはリアリティー！ 生死の瞬間を捉えてこそ、プロカメラマン！」

そのうちに、徐々に子猫の動きは鈍くなっていき、今にも沈みそうになる。

「アキラ……！」

「ああ、任せておけ」

アキラはカメラを置き、服を脱ぐと池の中へと飛び込んだ。

濡れねずみのアキラ。その手には、同じくずぶぬれの子猫。ぶるぶると震えている。

横では、鎧姿が手にした杖で怪人を叩きのめしている。

「何で助けなかったの！ 写真なんかどうでもいいでしょ、この役立たず！」

「ひいつ、すみませんー！」

やがて子猫は、ぷるっと体を震わせると、小さく『にい……』と鳴いた。

「良かった……元気そうです」

フユリスは服を着るアキラから子猫を受け取る。

「ブレイバー、今回は引き揚げる。次の時を覚えているがいい！」

怪人を引きずり、去っていく鎧姿。良くは分からないが、勝利したようだ。

「もう、大丈夫だからね……」

子猫を抱きながら、僅かに顔をほころばせるフユリス。かしゃっ。

アキラはカメラを構え、小さな音がした。

やがて日は流れ、写真大会の結果発表日。商店街にはたくさん  
の写真が張り出されている。通行人達はそれを眺め、気に入ったもの  
に票を入れるのだ。

やがて集計も終わり、結果が張り出される。大きく引き伸ばされ  
た写真。そこには、ひとりの少女の姿が焼き付けられている。子猫  
を抱きしめ、僅かに顔をほころばせている少女。

それは、実に暖かく、心に焼きつく姿であった……。

後日、あちこちの写真家からフユリスに撮影の申し込みが来て、  
彼女が辟易したのは別のお話。

## 第十二話：突撃、許されざるお見合い

「……………うむ」

ネクタイを締め、きりりと決める。日頃の着慣れた革ジャン、ジーンズの姿ではなく、ピシツとしたスーツ姿。しかし、意外にも似合っている。

「行きますよ、アキラさん？」

「はい、ただいま」

そして咳払いをひとつすると、アキラはその建物へ向かって歩き出した。

……………。

「お見合いー？」

弥生が素っ頓狂な声をあげる。食卓の席。そこで突然真由美が切り出した話。それは驚きをもって迎えられた。

「でも私、まだ結婚する気なんて無いわよ？」

弥生はまだまだ遊びたい盛りだ。将来の明確なビジョンはないが、結婚なんてごめんである。そんな弥生を、不思議そうな顔で眺める真由美。

「そうね。弥生にはまだ結婚は無理よね」

「だったらそんなお見合い話、何で持ってきたの？」

「私の知り合いの方からなのよ。急にお話があった……………」  
「いくら知り合いとはいえ、高校生にお見合いの話とはどういうことだろうか。事と次第によっては、きつちりと問いたださなければなるまい。」

「とにかく、私は行かないからね！」

「弥生も来るつもりだったの？」

……。微妙にかみ合わない会話。

「付き添いは、私だけで充分よ。弥生も心配性ね」  
齟齬に気づき、弥生は尋ねる。

「……私の、お見合いよね？」

「アキラさんのだけけれど……どうしたの？」

弥生はすつてんころりと椅子から転げ落ちた。

再び弥生も席に着き、真由美が詳しい話を始める。

「お相手はいいところのお嬢様でね、アキラさんのお話を聞いたら、ぜひ会ってみたいんだそうよ？」

そんな真由美の話を、トーストをかじりながら聞き耳を立てるフユリス。一言も聞き漏らさぬように。

当のアキラは、まだ自分の事が話題に上っているとも気づかず、のんきにコーヒートを口にしている。

「もう準備はできているそうよ。次の土曜日、大安吉日にお見合いの席が設けられるんですって」

「それでいいの、アキラは？」

その声に顔を上げるアキラ。どうやらさっぱり聞いていなかったようだ。

「あなた、お見合いさせられるのよ？ 何でそんなに平然としていられるのよ？」

「見合い？ 誰が？」

「あ・な・た・よっ！」

ギリギリとアイアンクローを仕掛ける弥生。そしてこの、のんきな大馬鹿者に、今の事態を手っ取り早く説明する。

「……なるほど。それでは真由美さんの顔を潰さないように、顔だけでも出すとするか」

「そうしてくれると助かるわ。準備は私に任せてくださいね」

そして、朝食は終わる。各々が席を立つていく中、ひとり取り残されるフユリス。

「……お見合い……アキラが……」

そして、なにやら決心を固めたかのように頷き、席を立つのだった。

「アキラ、ちょっと……」

部屋でごろごろとしているアキラに声をかける。寝転がったまま、首だけを向けるアキラ。

「何だ、フユリス？」

「アキラは、本当にお見合いをするんですか？」

「まあな。せつかくだし、こういう経験も悪くないと思っている」  
そのアキラの前に、バサツと一枚の紙を広げる。細かい文字がびっしりと並んだ紙。

「宇宙刑事規則第五百四十二条、現地惑星人との恋愛は、これを禁ず」

面白くもなさそうに、それを眺めるアキラ。

「言いたい事は分かりますよね？」

「恋愛無しならいいんだろう？ 見合いに出てはいけないとは、書いてないしな」

そのまま立ち上がると、部屋を出ていくアキラ。

「ちょっと、まだ話は終わっていません！」

「パトロールが終わってから、じっくり聞かせ」

さつさとアキラは姿を消してしまった。後に残された少女は、黙って爪を噛む。

たとえ規則で決まっていなくても、万が一という事があるのだ。あの馬鹿なアキラならば、それもありえるかもしれない。そうなのは連帯責任だ。何とかしなければなるまい。しかも早急に。

……決して、誰かとアキラがくっついて欲しくないという、邪な考えではないのだ。これは規則で決まっているから、だから自分は仕方なく……。

頭の中ですらざらざらと言いつきを並べながら、フュリスは部屋を後にするのだった。

やがて日が暮れ、パトロールからアキラが帰ってくる。それを出迎えるのは、玄関に仁王立ちしたフュリス。

「……遅いです」

「いや、いつも通りだと思うが……」

チラツと少女は腕の時計を眺める。

「二分も遅れています。言い訳は不許可です」

いつの間に、こんなに彼女は厳しくなったのだろう。今までは多少時間をオーバーしようとも、たいして気にも留めていなかったというのに。

そんな考え込むアキラを前に、フュリスは語りだす。

「このようなルーズな人が、お見合いなんてしても相手に恥を掻かせるだけです。いいですか、お見合いというものは、両者の威信をかけた行事なのです。お互いに相手の事を考え、礼節を尽くし、そしてそこで自分をアピールする事により結婚相手にふさわしいかどうかを見極めるのです。そもそもお見合いのルーツとは、遡ること……」

ふと気がつく、アキラの姿はそこには無かった。……逃げられた。

「ちょっと、まだお話は終わっていません!」

慌ててフュリスは後を追うのだった。

そしてお見合い当日。紆余曲折あったが、何とかこの日を迎える事ができた。アキラの服装も、真由美が用意してくれたスーツでピシッと決まっている。

タクシーで、目的地である料亭に辿り着く。日頃豪胆なアキラも、いささか緊張しているようだ。

「もつとリラックスしてください、ね？」

「はい。しかし、こつも緊張するものとは……予想もしていませんでした」

「ふふつ、大丈夫ですよ。いつものアキラさんを、相手のお嬢さんに見せてあげてくださいね」

そしてふたりは、並んで料亭の暖簾をくぐる。その後ろ姿を、こつそりと植え込みの影から覗く三人組。

「……入って行ったわね」

「ええ、確かに入りました」

興味津々と覗く弥生とフユリス。その後ろで恐々と、弥生の背中にしがみつく瑞穂。

「何で私たち、こんな事しているんでしょう……」

「瑞穂だつて興味あるでしょ？ あの唐変木がお見合いの席で何をやらかすのか……」

それは、確かに瑞穂も気にならないといえは嘘になる。何しろ彼は……。

『いっそのこと、お見合いでも何でもして宇宙刑事をやめてくれれば……』

考え事をしている間に、弥生達は料亭に近づいていく。

「見取り図は、調べてあります。こつちから進入しましょう」

「やっるう！ ほら瑞穂、置いてくわよ！」

その友人の声に、慌てて瑞穂も後を追うのだった。

カコーン……

獅子齧しの音が、広い庭内に響く。その庭に面した一室、そこにアキラは座っていた。

目の前には、おしとやかそうな和服の美女。お互い黙って、うつむいたまま時が過ぎる。そんなふたりを、微笑ましそうに眺める真由美。

「いやはや、アキラさんは正義のためになるお仕事をしていらつしやるのか？」

相手の付添い人が、そう尋ねる。

「あ、はい。街の平和のため、日夜励んでいます!」

「それは実にいい。お嬢さんも、頼りがいのある人が好きだと、前から申しておりますな……」

がははと笑う付き添いの男。和服の美女は、困ったような笑みを浮かべる。

「さて、私たちはそろそろお邪魔して、後は若いもの同士ということ……」

付添い人たちは、席を外す。そして残されるふたり。しばらく無言の時間が過ぎる。

「……どうです、外を散歩でも?」

「……はい」

アキラの誘いで、ふたりは庭へと出ていく。それを見つめる瞳三対。

「なんだ、思ったよりもまともじゃってるのね」

「……」

一安心したような弥生と、無言で成り行きを眺めるフユリス。穂はさつきから遠慮してか、前に出てこようとしない。

やがて見合い中のふたりは、三人が隠れている茂みの側へとやってくる。慌てて気配をこらす弥生達。

「楓さんの、ご趣味は?」

「はい……お花と、護身術を少々……」

「ほう、いい趣味だ。護身術には、俺も少々覚えが……」

なかなか会話もはずんでいるようだ。傍目にはいい雰囲気である。やがてふたりが去った後、茂みから顔を出す。

「うーん、これはひよつとするとひよつとするかもね」

「そんなの、私が許しません!」

「あら、フユリス焼きもち?」

「な、そんな、違います! 私はただ、法律に則って清く正しい……」

……」



「つまり、地球人とはダメでも、フュリスとの職場恋愛はオツケーなのよね？」

「そそ、そんな事……私は……！」

フュリスをからかう弥生。むきになって否定するフュリス。成る程、真由美がこの少女を構いたくなる気持ちも、分かるというものだ。

フュリスも普段は無表情の仮面を被ってはいるが、その中身は自分の気持ちに不器用な、歳相応の少女なのだ。

……ふと気がつくと、瑞穂の姿が見えない。どこに行ったのだろうか。まさか、自分だけ先に逃げたとか……？

「何やってるのよ、まったく……むぐつ？」

突如、背後から口を押さえられる。そのままずると、茂みの中へと弥生は引きずられていった。

「それがまた傑作で……ん？」

談笑しながら歩くふたりの前に、立ちふさがる黒服の男達。その手には弥生、フュリス、瑞穂の三人が捕らわれている。

「……お前ら、何者だ？」

「お前に用はない。そこのお嬢さんに、野暮用があるのさ」

振り返り、お嬢様である楓を見る。プルプルと怒りに震える肩。

「われら……何をしとるんか分かつとるんか！」

突如としておしとやかさを消し、方言丸出しの言葉を発する楓。いや、それは方言ではない。いわゆるある種の『ヤ』のつく職業の用いる専門語だ。

「カタギのもんに手を出してから、ただで済むゆうて思うとるんか？」

「俺達はあるさえ何とかできればいいんだ。そういう命令を受けてきたんだよ！」

アキラは後ろ手に、楓を庇う。隙を窺うが、人質をとられていては、圧倒的に不利だ。

何とかしなければ……。しかし、どうやって？ 相手の狙いは楓さんだ。しかし、だからといって彼女を差し出して、解決などという真似はしたくない。それは正義に反する。

「大人しく一緒に来てもらおう。嫌だと言ったら、この子達を……」  
「分かったわ。そんなかわり、その子らには指一本触れたらいけんぞ？」

ゆつくりと、楓は一步踏み出す。にやりと笑う黒服の男達。その隙を突いて、フュリスは自分を捕まえている男の腕に噛み付いた。

「うぎゃあつ！ このガキッ！」

慌てて振りほどく。その勢いのままに、フュリスはアキラの方へと走る。

「甘いわよ！」

その一言と共に、弥生は華麗な一本背負いで自分を捕まえていた男を投げ飛ばす。

「……ごめんなさい！」

キンッ！

男に嫌な汗を流させる音を立てて、瑞穂が男の急所を蹴り上げる。悶絶する男。

そして三人は、アキラの側に駆け寄る。形勢逆転である。

「き、貴様ら……。こんな事をして、ただで済むと思っているのか！？」

「冗談は顔だけにしいや。今すぐ楽にしちやる……」

楓がそう言い、着物の袖を捲り上げたときには、すでにアキラが黒服たちに飛び掛ったところであった。

「断罪パーンチ！」

「断罪キーツク！」

「断罪ウエスタンリアット！」

畳み掛けるような攻撃の前に、ぼろ屑のようになっていく黒服た

ち。

そのあまりの早業に、楓はあつけにとられる。

そして後には、ぼろぼろの姿で積み重ねられた男達の山。綺麗にアキラが掃除してしまったのだ。

「女の子を人質に取り、あまつさえか弱き女性を襲おうとするなど、断じて許せん！」

アキラは楓に向き直る。

「大丈夫ですか、楓さん？」

「え、あ……はい、すみません、ご迷惑をおかけして……」

先ほどまでの、威勢の良さはどこへやら。すっかりおしとやかに戻る楓。

「なに、気にしないで結構です。何しろ俺は……」

側に駆け寄ってきたフユリスの頭を撫でながら言う。

「……正義の、味方ですから！」

「アキラさん、あなたにお手紙が届いているわよ？」

あの散々なお見合いから数日後、アキラの元に一通の手紙が届いた。差出人は……楓、あのお見合い相手である。

早速封を開けて読んでみる。横から弥生とフユリスも覗き込む。

「何々……。一文字アキラ様、お嬢様があなたの事をお気に召したらしく、ぜひあなたを我が極道会の若頭として迎えたく……」

びりっ！

突如横から伸びてきた手が、手紙を掴み引き裂く。

「何するんだよ、フユリス？」

「アキラ、あなたはまさかこんな誘いに乗ったりはしませんよね？ あんな女と、共に行ったりはしませんよね？」

尋ねる少女の目は、真剣だ。

アキラは、そんな少女の肩に優しく手を置く。

「俺は極道向きじゃない。しがない宇宙公務員がお似合いさ。お前と一緒に過ごす、この何でもない日常がさ」

満月の下、楓はひとり酒を飲んでいた。

「一文字アキラ、か……」

ああいう男がいるのなら、世の中まんざら捨てたものではないだろう。

「惚れちまったかな、ふふ……」

この夜空の下、どこかで彼もこの月を見ているのだろう。  
楓はぐいっと杯をあおった。

### 第十三話：ハイペリオンの憂鬱

大気圏の外、衛星軌道上に浮かぶ航宙巡洋艦。その名も『ハイペリオン』。

恒星間飛行を可能とし、様々な外敵に対処できるように武装を施された宇宙船。

しかし、その実態は軍の旧式を宇宙警察に払い下げられ、機動派出所として使用されているものである。

全自動化された船内に、乗員は一名のみ。

『フュリス、コンバットスーツを転送してくれ！』

時折入る無線。それに答えて、乗組員である少女はスーツを転送する。それが任務だからだ。

そのほかにも、常に地上を観察し、宇宙刑事のサポート、情報収集もこなさなくてはならない。しかし、予算削減のあおりを受け、それも満足にこなす事はできないのだ。

要約すると、暇なのである。

「……………はあ」

コンソールパネルに頬杖をつき、正面に広がる宇宙空間を眺める。美しい星の海などとは言いが、こつも見えていたのでは飽きもする。

「ごそごそとデスクを漁ると、一冊の雑誌を取り出す。先日弥生が、フュリスも読んでおいた方がいいわよー？」などと言って渡してきた女性向け雑誌だ。

とりあえず、パラパラとめくってみる。自分は英才教育を受けてきたのだ。知らない情報などはない。だから雑誌などを読まなくとも、知りたい事は……………。

「……………！」

とあるページに目がとまる。そこには『気になるあの人と、両思いになる方法』と強調フォントでデカデカと書かれている。

フユリスは辺りを見回す。自分以外、誰もいないことは分かっているのに、である。

深く深呼吸すると、ページをめくる。様々な事が、そこには書いてある。男に受ける、表情の作り方。好まれるスタイル。ファッション……。

彼女には欠けているものばかりだ。自分でも、可愛げが無い女だと思う。

そんな中、目を引く一文。

「時代は……妹萌え？」

アキラは町内のパトロールを終え、早乙女家へと帰ってきた。いつものように勢いよく玄関を開く。……そこには。

「……」

仁王立ちするフユリスの姿。

「す、すまん！」

思わず謝ってしまう。こういう時は、先手を取って謝るに限る。何が問題なのかはどうでもいい。とにかく、一刻も早く怒りを静めてもらわねば。

「……フユリス？」

しかし、予想に反してきつい言葉もハリセンも飛んでは来ない。ただじつと少女はアキラの事を眺めている。

その頬は心なしに赤く、もじもじと何かをためらっているような様子。

「えっと、その……お帰りなさい、お、お兄ちゃん……」

そして絞り出すような声でそう言つと、フユリスはぱっと身を翻して奥へと駆け込んでいってしまった。

「何だったんだ、一体？」

アキラにはさっぱり訳が分からなかった。  
そして夕食の席。

「ご飯の前にはいただきますですよ、アキ……お兄ちゃん」

いつものように挨拶を省略して食事をしようとしたアキラに、フユリスはそうたしなめる。相変わらずその呼び名は変わらない。

「なあ、フユリス……」

「何ですか、お兄ちゃん？」

「その呼び方、やめてくれないか？ いつもみたいに呼び捨てでいい。確かに俺は年上だが、お兄ちゃんと呼ばれるような事は……」

途端にフユリスはいつもに輪をかけて無表情になる。何か自分は悪いことを言ってしまったのだろうか？ そう思うアキラ。

食事を終わると、さっさとフユリスは部屋に戻り、押入れの中に入ってしまう。ハイペリオンへと戻ったのだろうか。

「どうしちゃったの、フユリス？」

「俺に聞かれてもなあ……」

「お兄ちゃん作戦は、失敗でしたか……」

フユリスはパラパラと雑誌をめくる。大抵の男は、いちころだと出ていたのだが……。どうやらアキラにそういう属性はなかったらしい。

とりあえず、次の手を捜す。……目にとまったのは、ひとつのアンケート。

「……次は、これでいってみましょうか」

ぱたんと雑誌を閉じる。そして再び、地上へと向かうのだった。

「……ふむ」

アキラは居間でテレビを見ていた。世界情勢に関心を払うことも正義の味方の勤めである。たとえそれが、プロ野球中継であって

も。

『トラはダメだ……ガッツが足りない、ガッツが』

真由美さんの差し入れてくれたビールをぐびりと飲む。よく冷えた液体が、喉に心地いい刺激を与える。

のんびりくつろいでいると、ガラツと戸を開け、フユリスが入ってきた。

「おう、一緒にテレビでも見るか？」

「……はい」

ソファアの空きスペース、アキラの隣に、くつつくように座る。

いつもはもつとスペースを空けて座るというのに、今日に限って距離が近い。

画面が切り替わり、映画のワンシーンが映る。俳優同士の、甘いキスシーン。どこかうつとりとした瞳で眺めながら、フユリスはもじもじと身を摺り寄せてくる。

「フユリス、お前もしかして……」

呼びかけるアキラを、潤んだ瞳で見つめる。

……。

「トイレ行きたいなら、我慢しないで行ってきた方がいいぞ？」

「馬鹿っ！」

パシーンとアキラに平手を食らわせ、フユリスは肩を怒らせ去っていく。なにがなんだか分からず、取り残されるアキラ。

「少し、デリカシーが足りなかったかな……？」

叩かれた頬をさすりながら、アキラは呟いた。

「甘え上手な女なんて、そもそも私には無理だったんです」

三度雑誌をめくる。もう少し、身の丈にあつた作戦が必要だろう。無茶な自分を演じて、それで失敗したのでは意味が無い。

やがて、雑誌の中にとある一文を見つける。



「……次は、これですね」

ぱたんと雑誌を閉じ、転送装置へと向かう。自分の予想が間違っていないければ、アキラは今頃……。

『恥ずかしいけれど……やるしかありません』

転送が終了し、アキラの部屋の押入れに出る。アキラは部屋にいない。予想通りだ。

部屋を出て、風呂場へ向かう。脱衣所で服を脱ぎ、裸身にタオルを巻く。風呂場からは水の音が聞こえてくる。間違いなく、中に入っているのだ。

大きく息をつき、決心を固める。そして、ゆっくりと風呂場への戸を開いた。

もうもうと立ち込める湯気の向こう、人の姿が見える。それを確認すると、フュリスはおもむろに小さく悲鳴をあげた。

「……きゃっ！ ごめんなさい、先に入っているとは、知らなかったの……」

「あら、フュリスちゃん？」

そこにいたのは、予想していた人物ではなかった。にこやかに微笑む真由美。フュリスは残念なような、安心したような気持ちになる。

「せっかくだから、一緒に入りましょう？」

真由美に勧められるまま、共に風呂に入る。当初の目的はどこへやら。一緒に広い湯船につかる真由美を見る。そして、自分の貧相な体と比べる。

「はあ……」

思わずため息も出てしまう。今まではたいして自分の体のことなど、気にはしなかったのだが、今となっては話は別なのだ。

そんな浮かない顔をする少女に、真由美は声をかける。

「ため息をつくと、幸せが逃げちゃうわよ？」

そう言われても、フュリスの幸せは逃げっぱなしである。追いかければどこまでも逃げるし、立ち止まれば、手の届きそうな位置で

手招きする。本当に、世の中ままならない。

「……アキラさんのこと、考えているんでしょ？」

その問いかけに、思わず湯に沈みそうになる。

「な、そんな事ありません！」

「アキラさんね、ありのままの自分を出せる人がタイプなんですって」

真由美は唐突にそう言う。

「ありのままの、自分……？」

こんな可愛げの無い、無愛想な自分。それでも、彼は良いと言ってくれるのだろうか。

真由美はそつと湯船の中で少女を抱きしめる。

「自分の良さを、信じてあげてね？」

今日も今日とて、アキラは怪人と戦った。ヘルメットパーツだけを瞬着し、その素手で相手を叩きのめしたのだ。

「うーむ……」

前から思っていたのだが、怪人たちの目的がさっぱり分からない。普通悪の怪人といえば、幼稚園バスを襲ったり毒をまいたり、悪の限りを尽くすものだ。

しかし、今回の怪人はタバコのポイ捨てをする若者に折檻を加えていた。考えようによっては善行である。果たして、倒す必要があったのだろうか。

悩みながらもアキラは玄関をくぐる。そこには、彼の帰りを待つ少女の姿。

『ありのままの……自分……』

フユリスはアキラに駆け寄り、そして。

スパーンッ！

強烈なハリセンの一撃を加えた。

「遅いです。夕食の準備ができないじゃないですか」

「ああ、すまん……」

そう言いながらも、どこかアキラは楽しそうだ。

「どうしたんですか、ニヤニヤして？」

「いや、やっぱりフュリスはこうでなくちゃなってさ」

ぼんぽんと彼女の頭を撫でて、廊下を去っていく。

ぼーっとその後ろ姿を眺める少女。

『少なくとも、ありのままの自分は、嫌われてはいない……』

その事が確認できただけでも、良しとしよう。いつの日か、本当の気持ちを伝える事ができるから。

……そう信じて。

## 第十四話：惑う心、真っ直ぐな正義

『誰が悪で、誰が正義かは……歴史が決める事だ』

その夜、一文字アキラは居間でテレビを眺めていた。画面では、役者が陳腐な台詞を口にしている。

「……ふむ」

隣の弥生は、退屈そうにあくびをかみ殺している。しかし、アキラは真剣に見入っている。何がそんなに面白いのだろうか？

「こんな始まって三秒であらすじが分かっちゃうような映画、面白いの？」

「うむ、色々と参考になる。特に今の台詞はなかなかのものだった」  
面白いかの答えにはなっていないのだが……特に気にする事も無いだろう。アキラは万事、この調子だ。そもそもストーリーなどを気にするような男ではないのだ。

……それはそれで、製作者達には申し訳ないことだが。

「もう私は寝るわ。後はごゆっくり」

弥生が自室へと戻っていく。アキラはひとり、映画を食い入るように見つめるのだった。

そして、次の日の朝。

「ふわぁ……」

大きなあくびをして、アキラが遅れて食卓へとやってくる。

「あら、アキラさんが大あくびなんて、珍しいわね」

真由美が朝食を運びながら尋ねる。

「ええ、ちよつと映画を観てまして……」

「あらあら、それでお寝坊を？」

たかが映画を観る程度で、寝坊などするものだろうか？

「何でもノンストップ九時間放映とかで……」

思わず弥生は飲んでいたコーヒーを噴き出しそうになった。

「なにあの映画、そんな馬鹿げたものだったの？ アキラもそんなのに付き合っていないで、さっさと寝ればよかったのに」

「しかし、なかなかためになる映画だったぞ？ 二千の熱に耐えるスペースシャトルの耐熱タイルとか、クロイツフェルト・ヤコブ病の事とか詳しく……」

「どついう映画よ……そんなの見るなんて、暇人のすることよ」

がつくりきってしまう。そんな弥生を眺めながら、フュリスはホットミルクに口をつけ。

「まあ、馬鹿ですから……」

……と呟いた。

今日も弥生は買い物に出かける。アキラは当然荷物持ち。そろそろこの姿も、板についてきている。

それではただの情けない男なのだが、本人が気にしていないので、まあいいだろう。

「まだ回るのか？ そろそろどこかで休憩でもしないか？」

「そうね……」

アキラの珍しくまともな意見に、弥生も賛成する。横を見れば、ちょうど喫茶店がある。

そこに、連れ立って入る。カウベルが鳴り、店員に席へと案内される。

「さーて、何を頼んじゃおっかなー」

嬉しそうにメニューを眺める弥生。そのはしゃぎっぷりに、アキラは尋ねる。

「まさか、俺に奢らせようとか考えてないよな？」

「そのまさかよ。別にいいじゃない、アキラだってお給料は貰って

るんでしょ、公務員なんだし」

確かに現地滞在用の金は貰っている。しかし、その実態はきつちりとフユリスに財布の紐を握られているのだ。迂闊に無駄遣いもできやしない。

「……あまり高いものは駄目だぞ？」

しかし、アキラはとことん他人に甘いのだった。散々悩んだ挙句に、弥生が選んだものはメニューでも飛び切り大きくプリントされたもの。

「ハイパーゴージャススペシャルデラックススペースパフェ？ 食い物が、それ？」

「メニューに載ってるんだから、当たり前でしょ！ 一度頼んでみたかったのよねー」

店員に注文を伝える。即座に店員は大声を張り上げる。

「H G S D S パフェ、入りまーす」

「はいよー！」

アキラはとりあえず財布の中身を確認した。昼食代……削らないと駄目か……。心の中でがっくりと肩を落とす。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

やがて、バケツ一杯分はあろうかという量のパフェが運ばれてきた。いくら甘い物は別腹だといっても、これは流石に弥生にはきついのではないだろうか。

「うーん、美味しー」

しかしまったく気にする様子も無く、彼女はパフェを征服していく。少女の食欲という者に、改めて敬意を表す。

「ところでアキラ、聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

パフェを口に運びながら、弥生は問いかける。

「あなた、フユリスの事はどう思ってるの？」

フユリス、アキラのサポート役。いつも空の上のハイペリオンに

いて、様々な雑務をこなしている。幸い始末書の類は出した事は無いが、それでも諸々の仕事は山積みだ。

あの年頃の少女には、少々ハードワークかもしれない。たまには骨休めをさせてやりたいものだが……。

素直にそう口にする。その途端、にんまりと微笑む弥生。

「だったらさ、これ、あげるわ」

差し出されたのは、二枚のチケット。

「これは……映画のチケットか？」

「そうよ。ほんとは弥生と行くはずだったんだけど、用事があるってキャンセルされちゃった。だから、あなたにあげる」

チケットを受け取る。しかし、ペアチケット……誰と行くべきだろうか。

「真由美さんでも、誘うか……」

「この馬鹿！」

ぺちんと頭を叩かれるアキラ。

「日頃の感謝を込めて、フユリスと行くのが普通でしょうが。ほんつと、唐変木よね」

弥生はアキラの態度にあきれ果ているようだ。確かに、日頃の仕事に感謝して、映画にあの少女を誘うのも悪くはない……そう思うアキラ。

「フユリスも喜ぶわよ、きつと」

「そうだろうか……？」

だが、あの何事にも無関心な少女が、こういう俗っぽい事に興味を示すとは、とても思えないのだが……。

まあ、せつかくだから誘うだけ誘ってみるか。断られて元々。運良く誘えればしめたものだ。そんなわけで、アキラは。

「それじゃあ、頂くよ」

「うん、あの子にうんと優しくしてあげてね？」

妙に含みのある笑顔で、そう言われる。細かい事は気にせずに、アキラはチケットをポケットにしまった。

気がつけば、パフエの器は空になりかけていた。

再び荷物を持ち、ショッピングを続ける。この調子だと、まだまだ荷物は増えそうだ。

山のようになった荷物を、崩さないように歩いていると、突如前を歩いていた弥生が立ち止まった。それにぶつかり、荷物を取り落としそうになるアキラ。

「どうしたんだ、急に？」

「……前、見て？」

指し示す方を見る。そこには、ふたりの人間が立っていた。

その片方には、見覚えがある。以前公園で、写真勝負をした時の怪人の親玉だ。

「待ちくたびれたぞ、一文字アキラ、いやブレイバー！」

待たされたのは弥生がパフエを食べていたからだ。それはさて置き。

「私の名はジャステイー、今日こそ貴様を倒して、この街を征服させてもらおう！」

「そんな事はさせない、瞬着！」

荷物を傷めないように置き、ポーズをつけてコンバットスーツを転送する。たちまち光と共に装着されるヘルメット。

「宇宙刑事、ブレイバー！ここに参上！」

アキラが瞬着したのを見届けると、ジャステイーは配下の怪人に命令を下す。

「行け、マリオネッタ！お前の力で、奴を思うがままにせよ！」

「御意！」

怪しげな奇術師のような格好をした怪人は、両手を前に差し出し、念を籠める。

ふよふよふよ……



怪しげな念が、アキラ達ふたりに向かって放たれる。その念を浴び、急に気分悪そうにしゃがみ込む弥生。

「どうした、弥生？」

「ちよっと、気分が……体がまるで、自分のものじゃないみたい……」

あの念の力か？ しかし、アキラにはまったく被害がない。

説明しよう。アキラの被るヘッドパーツには、有害な電波などを寄せ付けないシールドが施されているのだ！

「おい、しっかりしろ！」

「あ、う……頭が……ああっ！」

急に弥生の腕が、唸りをあげて襲い掛かってくる。間一髪でそれを避けるブレイバー！

「どうしたんだ、いきなり！」

「分からない、体が勝手に……避けて！」

今度は回し蹴り。そしてパンチへのコンボ。腕をクロスさせて、それを防ぐ。

これはどういう事なのか？ 弥生が自分の意思に反して、アキラに攻撃をしているとでもいうのか？

「ふひやはは！ 我の念を受けたものは、我が操り人形と化すのだ！ 行け、少女よ！ その手でブレイバーを葬り去るのだ！」

弥生からの激しい攻撃をかわしながら、アキラは考える。何とかして、この少女を元に戻さねば……。しかし、どうやって？

「無駄だぞブレイバー。この精神操作は術にかかったものが意識を失うか、極度の興奮状態に陥らない限りは解けない！ 貴様は、その少女を気絶させる事ができるのか？ 正義の味方が、罪の無い少女に攻撃できるのか？」

じりじりと押されていくブレイバー。弥生の攻撃は的確だ。このまま防戦一方では、負ける事は無くとも勝つ事もできない。しかし、術を解くためとはいえ、弥生に手を上げるなんてこと、できるわけが無い。

「一体どうすればいいんだ……傷つけずに気絶させる方法……そう  
だ、確か昨日の夜観た映画で……」

「一か八か、やってみるしかあるまい。」

弥生が攻撃するために踏み込んでくるところを、抱きついて身動  
きを封じる。そして。

「弥生ちゃん、すまない！」

唐突に、その唇を奪う。みるみる顔を赤くさせていく弥生。そし  
て次の瞬間には、思い切りブレイバーを張り倒していた。

「何するのよっ、この変態！」

「すまん、術は解けたのか？」

慌てて少女は体を動かしてみる。問題なく、動く体。術の支配か  
らは逃れられたようだ。

「さて、次は貴様の番だ、怪人マリオネッタ！」

「ふっ、ならばもう一度術であの少女を……」

「待て、マリオネッタ」

ジャステイーが怪人を止める。

「もうこれ以上弥生……いや、あの少女を巻き込むわけにはいかん。  
撤退だ」

マントを翻し、ジャステイーは去っていく。

何とか今回も撃退できたようだ。アキラはヘッドパーツの装着を  
解除する。

「意外に手ごわい相手だった……まさか弥生ちゃんの相手をする羽  
目になるとはな」

「それよりアキラ、何で私を気絶させずに、キスなんてしたの？」

アキラは荷物を抱え上げながら、答える。

「昨夜観た映画で、キスで相手を気絶させるシーンがあった。そこ  
で俺も真似してみた」

「そんな事で気絶するわけ無いでしょ！」

「だったら何故、術が解けたんだ？」

アキラはどうやら、先ほど言われた事を忘れていらしい。術を

解くには、『気絶』もしくは『極度の興奮』が必要。

『まさかアキラ相手にキスだなんて。いくら相手がアレでも、流石にドキドキだわ……』

荷物持ちのアキラを急かしながら、家路を急ぐ。

それでも、わずかばかりの感謝がある。あの時、アキラは自分を傷つけることだけは、避けてくれた。

それだけは、感謝しなければならぬだろう。キスと引き換えで、チャラだが。

「ただいまー！」

大きく声を上げ、家のドアを開ける。そこには、玄関先でじつと帰りを待つ少女。

「アキラ……あなた、弥生さんに何をしたんですか？ 返答次第では、折檻です……」

彼女はハイペリオンから、戦闘の様子をつぶさに観察していたのだ。

こうして、その夜の夕食には、アキラは姿を見せる事は無かった。正義の味方も、嫉妬には勝てないというお話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2856g/>

---

瞬着装甲プレイヤー

2010年10月8日21時23分発行